麗澤教育　第二号　〈目　次〉

写真・麗澤大学近況 …… 2

―・―

麗澤人に期待するもの …… 堀出　一郎 …… 6

麗澤で学んだことの意味 …… 田中　駿平 …… 13

古くて新しい人口問題 …… 河野　稠果 …… 17

異文化コミュニケーションとトレーニング …… 八代　京子 …… 22

〝アジアへの貢献〟について考える …… 竹原　茂 …… 26

演劇と教育と生活 …… 杉本　隆一 …… 32

寮教育を考える …… 吉田　順一 …… 36

麗陵祭を運営して学んだこと …… 川瀬　達也 …… 42

麗澤大学との出会い …… 玉井千恵子 …… 45

麗澤大学における課外活動の現況 …… 千島　英一 …… 49

麗澤大学英語劇グループの歴史 …… マーウィン・トリキアン …… 53

山岳系課外活動の現状と指導上の問題点 …… 長谷川教佐 …… 60

麗澤大学剣道部と堀ノ内勇吉先生 …… 奥野　保明 …… 70

野球と勉強の狭間に …… 谷口　洋志 …… 75

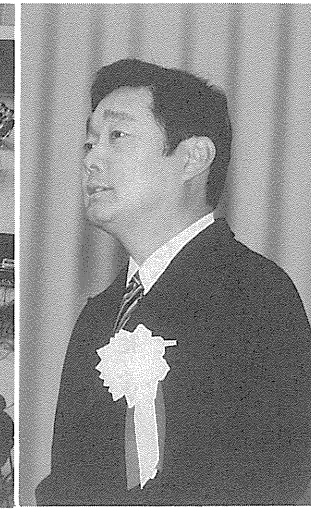
愛する馬たちと共に …… 中野　千秋 …… 79

―・―

進路・就職を考えるにあたって …… 就職部 …… 85

麗澤大学近況

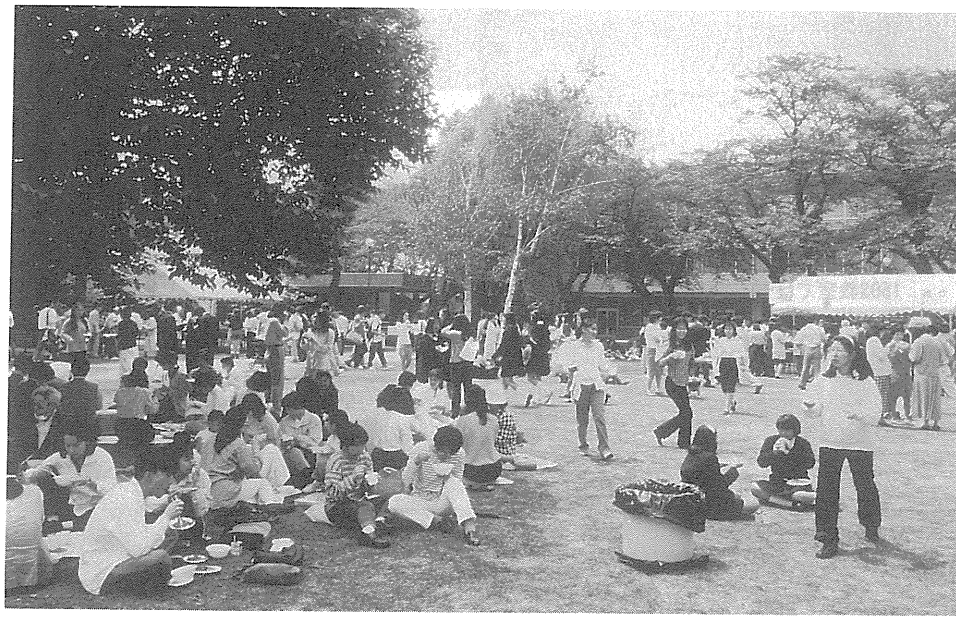
平成７年度入学式



歓迎の言葉を述べる
廣池学長

平成６年度卒業式

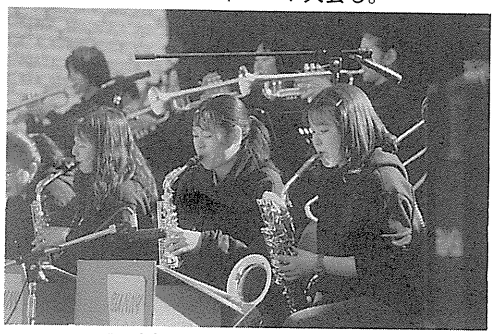
マレーシアからの留学生が民族音楽を披露



幼稚園、高校、大学等、廣池学園の関係者が集う野外昼食会

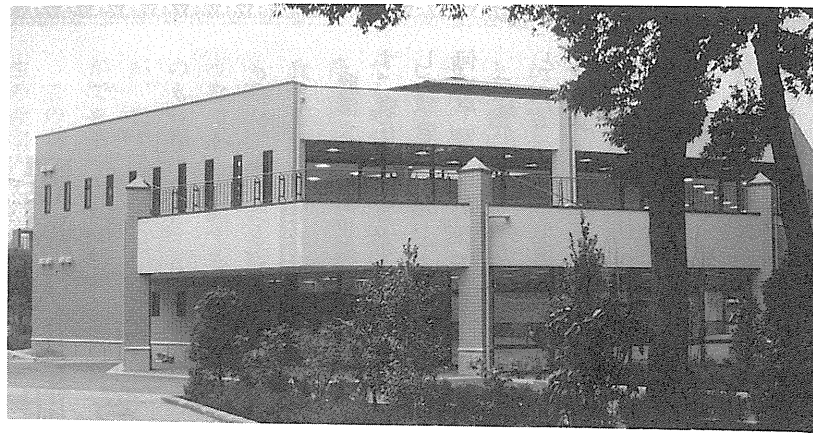
進路相談できめ細かに指導する就職部

来場者が1万5千人を突破した麗寮祭。
1503教室ではディベート大会も。



麗陵祭の催しで軽音楽が演奏

毎年恒例の国際交流もちつき大会



一月九日にオープンしたばかりの学生会館食堂棟「柊―ひいらぎ―」

馬術部のメンバー

水野ゼミの学生による創作演劇（「僕のばあちゃんボケ老人」）を柏市民文化会館で公演。

麗澤人に期待するもの
―教育現場からの反省

国際経済学部教授　堀出　一郎

麗澤大学にお世話になって、この三月で丸三年になります。就任当時の二年生が、国際経済学部の第一回卒業生として学窓を巣立って行くのを見ますと、月日の経つのが如何に早いものか、しみじみ痛感させられます。

ご縁がありファカルティに加えて頂きましたが、正直なところ、お話しを頂く前には、廣池学園、モラロジー教育について、皆目知識がございませんでした。ただ、以前、南柏の前ケ碕に住んでいた関係で、学園の近所へは、サイクリングでちょいちょい参っており、緑の多い閑静な学園という印象を強く抱いていましたが、モラロジーが何たるものかについては、まったく無知であったと申し上げても嘘ではございません。早速、廣池博士に関するご本を頂戴し、麗澤のいわれ、モラロジー、道徳教育について勉強させて頂きましたが、前途程遠く、いまでも、まだ一知半解の状態で、博士の精神を十分に体得できず、忸怩たるものがございます。

さて、今回は、麗澤人に期待するものという大変難しい課題を頂戴しましたが、お仲間へは加えて頂きましたが、前述のごとく、麗澤人としては、まったくお恥ずかしいレベルでございます。したがいまして、ご要望には添いかねるのではないかと危惧しつつ、羊頭狗肉ではありますが、新米教員としての、この三年間の学校生活の中での体験に基づき、恥を忍んで若干の反省を述べさせて頂き、課題へのお答えに代えさせて頂きます。

福住正兄氏筆記の二宮翁夜話（報徳文庫）の中に「学問は躬をもって教ふべし」という章があります。尊徳翁の弟

子の一人で儒学を教えている先生が、ある日、泥酔して路傍にふせり、醜態をきわめておりました。それを見たその先生の教え子が、明日から、さっぱり塾に来なくなってしまったのです。そこで怒り狂った先生は師の尊徳翁を尋ね、「確かに私の行いは正しいとは申せません。しかし、私の教えているのは聖人の書物です。たとえ私の行いが悪くても、聖人の教えを学ばないのはおかしいと思います。何とか二宮先生からも、勉強をせよと説諭して頂けませんか」とお願いをしました。尊徳翁のお答えは、「怒りなさんな。まあ、譬話をお聞きなされ。炊いた飯を肥料桶に入れたとしよう。君は食べるか。この飯はもともと清浄な米を炊いたものだから間違いなく清浄なものである。ただ違いは不浄な肥料桶に入っているというだけだ。しかし、とても食べる気にはなれないだろう。君のいう学問も同じようなものだ。赫々たる聖人の学問であっても、君が肥料桶のような口から講義するのでは、弟子たちが話を聴きに来ないのも無理はない」というものでした。要は、「教えるものが、まず己を正し、はじめて弟子に正しい行いを説くことができる」と私は解釈しました。

この尊徳翁のお話を拝読し、最近よく話題になる大学生の教室内でのマナーについて考えてみますと、わたくしも時々経験するのですが、授業を欠席する学生、出席をしても私語に走ったり、居眠りしている学生が少なくないのは、わたくしの場合は、教える側のわたくしに責任があるのではないかと思います。数少ない経験ですが、学生全員が、目を光らせ講師の話を静粛に謹聴している特別授業を見たことがあります。あとで学生の皆さんから、感想文を頂きますと、揃ってこんな素晴しい話は授業で聴いたことがないと書いてありました。講師の話は、自らの体験に基づく苦労話なのですが、その真摯な態度、人生観が、きっと学生諸君の琴線に触れたのでしょう。私も、感想文を読んで、これがいつもの学生諸君の実態なのかと、安堵の気持ちと共に冷水を浴びせられたような感じがいたしました。

学生数が少ないうちはよいのですが、人数が百人を超えますと、教室も一杯となり、前の方に座っている人は静粛に講義に耳を傾けペンを走らせていますが、うしろの方に座っている人は、話が聞えにくいこともあり、どうしても気がゆるみ、つい隣の人に話しかけたり、おしゃべりを始めてしまいます。わたくしの経験でも、とくに新年度の始めには、学生諸君もまだ落ち着かず、教える方もエンジンが思うようにかからず、いまひとつ授業に一体感が湧きに

くい思いをいたします。しかし、こちらが、凡愚なりにも精一杯努力して講義の準備をして参りますと、皆さんに通じるものがあるのでしょうか、気のせいかもしれませんが、ざわめきも収まるように思われます。

私の担当は、マーケティングです。マーケティングとは、顧客の欲求・ニーズを探り出し、どのように対応すれば、顧客に心底から喜んで頂けるかを、探究し、実行に移すことを研究する学問であります。研究者としてのわたくしの顧客は、仲間内の研究者か、マーケティング実務に携わっておられる実務家になりますが、教育者としての顧客は、私の授業を受講して下さる学生諸君に他なりません。したがいまして、わたくしの当面の課題は、学生諸君が、いまのわたくしの講義を果たして満足して聴いて頂いているかどうかであります。学生諸君が、わたくしの講義に何を期待しているか、また、わたくしは、学生諸君に、いまのビジネス社会におけるマーケティングの実情を的確に、分かりやすく説明しているであろうか、また、今日に至るまでの、いろいろなマーケティング事情ならびに研究状況を簡潔に説明してきたであろうか、そう考えて参りますと、自信のないことおびただしいものです。授業中に、私語が始まり、教室内にざわめきが聞えて参るほど、話をする身にとって不論快なことはありません。つい言葉を荒げてしまいがちです。教師の権威でというのもおかしな話ですが、立場を利用して、退室を命じたり、注意をするのですが、後味の悪いこと、この上もありません。

しかし、なぜそうなるのであろうかと考えて行きますと、やはり、わたくしの講義に原因があるように思われることが多いのです。自分でも十分に理解していないことを、いかにも分かったように知ったかぶりで講義をしていたのではなかろうか、反省して見れば思い当たることが少なくありません。

学生諸君の心を捉える講義、生き生きとして、めりはりのある講義ができているかどうかを考えれば、そうといえる自信はとてもございません。問題点はこうといっても、先生ならどうすると聞かれ、即座に確答ができるとは限りません。特にマーケティングのような学問では、実践のともなわない話は、いかにエレガントで筋道が通っていても、本筋から逸脱してしまいます。昔のビジネス仲間に何を講義しているのと聞かれ、胸を張って答えられる授業ができれば最高なのですが、そう簡単ではありません。ビジネス界での現役の仲間に耳を傾けてもらうには、ハイレベルの研究の最前線の話でなくては、とても関心を引けそうもあ

りません。

それでは、学生諸君の場合はどうでしょうか。確かに大学に入って初めて聞く話には惑うかもしれません。しかし、学生諸君には、始めて学ぶ学問に対する先入観がありません。よい意味で白紙の状態と考えてよいでしょう。授業をしていて、いつも感じるのですが、学生諸君は、本能的というか、何か偽物と本物を見分ける生得的な能力をもっているように見えます。恥ずかしい話ですが、ちょっと怠けると、見透かされてしまうような気がするのです。そういう意味では、学生諸君のもつ真贋を見分ける生得本能は恐るべきものと考えざるをえません。したがって、学生諸君の場合でも、講義に工夫を加え、テキストに書かれていない目新しい話・研究を語れば、たぶん退屈を吹き飛ばし、興味を引き付けることができるのではないかと考えます。

「同時代感覚が失われた時は去る時だ」とは、尊敬する作家開高健さんから直接伺った言葉です。同時代感覚に満ち興味あふれる講義ができれば最高ですが、そこは凡人の身、とてもそこまで辿り着ける自信はございません。しかし、百尺竿頭（かんとう）を目指す精神だけは忘れたくないものです。これから新学期が始まります。性根を入れ替え原点に立ち返って再出発したいと思っています。

授業の進め方について、もうひとつ、近ごろ考えることがあります。いまは、どこの大学でも、演習を除けば、大人数の講義が多く、とても一人一人の個性を考え、理解の程度を勘案しながら授業を進めることが大変難しい状況にあります。一応フィードバックを行ってはいますが、面白かったという意見があると同時によく分からなかったという声が必ず聞えて参ります。一体どうすればいいんだということになりますが、なかなか妙手が見つかりません。学生諸君が謹聴したくなり、考えるヒントになるような講義をするかしないかは、教師たるわたくしの責任であるということは分かっていても、授業は、学生諸君に知識を伝えるのか、それとも学び方を教えるのか、その点で悩みを抱えております。廣池博士は「形式的な学科試験で人物の優劣を決めることは学生に対する侮辱」と申されています。しかし、残念ながらわたくしは、いまは、学科試験を行っています。以前、レポートにしたらどうかと思い実施して見ましたが、本の丸写し、他人のレポートの丸写しという学生が多く、わたくしの経験では失敗でした。これもわたくしの課題の出し方の失敗というべきで、責任はわたくしにあります。

しかし、最近素晴しい発見をいたしました。演習での卒業論文の成果です。わたくしの演習では、四年生の始めに個人的に研究テーマを決めますが、この一月に諸君から論文を提出してもらいました。昨年の四月から、順番に三回ほど経過報告をしてもらい、仲間の意見・助言をもらいながら、研究を進めてもらいました。テーマは、まったく自由に選んでもらい、分野に特に制限はつけませんでした。「ギター産業の遍歴と行方」、「日本における香水のマーケティング市場」、「東京ディズニーランド」、「日本のレコード業界」、「映画におけるマーティング」という興味深い個別問題から、「CATV」、「CALS」というナウな問題、さらには、「物価二分の一革命」、「産業空洞化」、「昭和恐慌と平成金融恐慌」、「日本的経営システム」という最近の経営経済問題、それに「商品広告における色彩の特性・イメージ」、「広告メッセージ」、「アメリカのSCに見られる流通小売業」、「地球環境における企業のフィランソロピー」というマーケティングの問題というように、かなり多岐の分野に渉る研究論文ができ上がりました。研究途中で、わたくしがしたことといえば、課題選択の相談、論文の書き方における技術面での指導、参考文献の相談、資料収集の方法の助言であり、論文の作成は、まったく自力で行われました。皆が一番興味をもつ分野の研究ですから、しんどそうではありましたが、全員が精魂をこめて論文の完成に全力投球をしていたようです。

イギリスの哲学者ジョン・ロックは、「わたくしたちは、生来、揺り籃の時代でさえも、自由を愛し、命令されることを嫌うものです。したがって、学習を、遊び、気晴しとすること・・・　そして、自分から、教えてほしいと思うようにならせることが、大切です・・・」（ロック・教育に関する考察）と述べており、また、バートランド・ラッセルも、「外的な権威で抑えつけるのでなく、自発的な好奇心に訴えて、知的冒険の精神を植え付けること・・・教育の推進力は、学びたいという生徒の願いであるべきで、先生の権威であってはならない。教育に対する衝動は、生徒の側から生まれねばならない。しかし、易しく楽であるというわけにはならない」（ラッセル・教育論）と申しております。今回の卒業論文は、提出義務・提出期限・字数（四万字）を除けばまったく自由にしました。しかし、誰もが、マラソン選手がゴールインしたときのように、全力を出しきって卒業論文を提出してくれました。そういう意味では、ロック、ラッセルという碩学のいうように、学生諸君の自発的な学習意欲の精華が発揮されたものと確信し

ております。

論文の水準ですが、親の贔屓目といわれても仕様がありませんが、審査したところ実によくできていました。いつの間にできるようになったのかと思えるほど期待を遥かに上回る進歩です。いままでの筆記テストや外国書購読では、なかなか発見できなかった能力・才能を引き出せたものと確信しております。そういう意味では、本来の教育の役目が達成できたのではなかったかと自惚れたくなるほどの気持ちです。わたくしは、授業については、いまなお、迷いからの脱却に困難を覚えていますが、今回提出の論文に関する限り、やはり、人には、向いた能力があり、向いた分野でやる気を出せば、やれるものだという普段からの自説の検証をすることができました。

最後にもう一つ。学校の成績と社会に出てからの成果です。わたくしも学校を出てから四十二年になりますが、同級生、また友人を見る限り、ご本人たちには申し訳ない話ですが、社会での成功と学校での成績の間には、必ずしも正の相関関係が見られないということです。ロックは、「学識は、精神のよい人にとっては大いに助けとなるが、精神のよくない人にとっては、さらに愚かな人間、悪い人間にする役にしか立ちません」（ロック・教育に関する考察）と申しております。黒い噂を立てられ、マスコミの攻撃対象となっている人の中に、かつての大秀才といわれた人が、たくさんおられることは、どなたもご存じの通りです。廣池博士は、「出藍の大器は、必ずや聖人正統の知恵を継承する学者の指導と、自発的なる自習研鑽と、自発的なる最高品性の志願を有する学徒の精神と、三者相倚り相俟ってはじめてできるものであります。・・・他人から監督せられ、試験せられて生きていくというような種類の人間とは異なるのであります。・・・ことに、単なる利己的本能に基づく異端の学問や知識を試験して、その優秀者を社会に出したりとて、社会はこれがために利するところなく、かえって今日のごとくに危険思想や知能犯の増加を示し・・・」（廣池千九郎・『モラロジー教育に関する基礎的重要書類』）と申されております。オウム事件を見ても分かるように、関係者の中には、たくさんの秀才がいます。したがって、人間の優劣と学業の優劣とは関係がないことは、一目瞭然であります。

世の中で真に尊敬される人とは、人格と識見が相俟っている人物であります。豊かな識見をもつ人の中にも人格的に優れているとは申せない人がおり、また、人格的に優れていても識見に不足の見られる人がいます。両者相俟つ人

物はなかなか得難いものです。しかし、実社会では、どちらかといえば、学力よりも人格に重きが置かれます。学業に優れていることは、人物としての一つの必要条件にはなっても、十分条件にはなりえないのが社会の実情です。その点、特に、教育熱心といわれる親御さんの中には、誤解のある向きが多いように思えます。このさい、ここで、学校秀才であれば優れた人材という通念を拭い去る必要があることを強調しておきたいと思います。恥ずかしいことですが、わたくしなどは、その点、人格・識見、いずれにおいても、とても人前に顔出しのできないレベルの人間です。しかし、知人、友人で社会的に尊敬される地位にある仲間の中には、どちらかといえば、学業よりも、人格的に優れた人物が圧倒的に多く、大学卒業時の優等生がきわめて少ないことを申し上げ、結びの言葉に代えさせて頂きます。

「麗澤で学んだことの意味」

外国語学部教授・教務部部長
田中　駿平

麗澤大学を卒業した人たちからの、「社会に出てはじめて麗澤大学で学んだことの意味がわかった」という趣旨のコメントを聞いたり、読んだりすることがある。そういったことを言ってくれる人はさまざまで、その人たちの学生時代を思い起こしながら、彼女ならばさもありなんと受けとめることもあれば、失礼ながら、あの彼がそんなふうに考えていてくれるのかという驚きと、それだけに、続いてしみじみとうれしさを味わう場合もある。われわれは、つまるところそのことのために麗澤教育に携わってきたのではなかったかと思ったりする。尤も、この種のコメントに含まれる「麗澤で学んだこと」の内容は一律とは言えず、語学力に関してのことであったり、一般教育や専門の授業で学んだ内容である場合もあろうが、多くは、社会に出て、あるいは家庭をもち、いろいろな人に関わってゆくとき、そこで直面するさまざまな困難な状況の中で、どのような選択を何を基準にして行なうのかと自問し、答えを出してゆく、そのときの自分を支えてくれるものを指しての発言である場合である。

昨年、それとも一昨年のことであったか、ある、国の外交にかかわる仕事をしている人、この人は大学ではなく麗澤高校の卒業生だが、その人が、「ノブレス・オブリージュ」という言葉で、自分が仕事に向かうときの心意気を表現したのを記憶にとどめたことがある。言葉の選択はともかく、世界平和、国の平安のために我ゆかん、私情や私的利害を超えて、より大きな、大切なことに向かって献身しようというその気持ちを指していたものと理解した。数日後に赴くことになっていた新しい任地での仕事のことが心をかす

めたのかもしれない。あるいは、巨大な組織の中で担ってきた重い責任や、これまで越えてきた幾多の困難を思い描いてのことだったのかもしれない。ともかくそういう思いで仕事に立ち向かうときに彼はいつもこの学園の創立者の教え、そして麗澤精神を意識してきたというのであった。

このようなケースでなくとも、もっと日常的なところで、あるいは職場とか地域社会といった、もう少し個人的なレベルでの、自分を処する姿勢、人間関係の受けとめ方、構築の仕方を意識しての発言であることもあろう。大学四年間をとおして知らず知らずのうちに学び自分のものとしていながら、社会という別の鏡に映して見るまで確認する機会のなかった人生観とでもいったらよいであろうか。一言でいえば、自分たちに勇気を与えてくれるもの、それが麗澤精神ということになる。

この「麗澤精神」はどこで修得されるのかということになると、授業そのものの内容である場合はむしろ稀で、それにまつわるもの、教師の講義内容よりは、それを伝えようとする熱意、さらにそれよりは、講義の中でそれとなく現われる人柄、あるいは横道にそれてもらされるエピソードということになる。ある授業で、一八世紀イギリスの思想家ジョン・ラスキンがオックスフォード大学「スレード」教授就任の記念講義をした際に、その講義を何としても聞こうとつめかけた聴衆が多すぎて、会場を、予定していた教室から大講堂「シェルドニアン・シアター」に移したのに、なお人があふれたというエピソードを話して、そのように何をおいても駆けつけたくなる議義というものに出会っているかと問うたところ、一人の女子学生がH先生の名を挙げた。よく存じ上げている方で、さもありなんと納得したが、鈴なりの学生を感動させるような講義は、まず昔話しになってしまっている。世の中全体の価値観が妙に多様化し、大学において大勢の学生の心をゆさぶるような大講義というものはほぼ絶えてしまったと思うこのごろである。それでも、授業をきっかけとして、教室の外、研究室とか教員の家庭において、課外活動の場、その他もろもろの状況での交流をとおして意識の奥に重ねられていく記憶が、後になって、「麗澤で学んだことの意味」として意識に蘇ってくるように思える。

「麗澤で学んだこと」は、学生時代あるいは卒業のときに何か具体的な形をもったものとして認識されているのではなく、むしろ、精神的土壌のようなもので、その土壌の中から、のちに、それぞれの状況に応じて、だんだんに形成されてゆくものではないだろうか。その土壌の中で徐々

に、あるいは突然に育て上げられてゆくものと言ってもよいであろう。その土壌をつくるために、われわれ教職員は、何かにつけて学生に関わるようにしているということになる。

ある学生からもらった今年の年賀状に、「昨年は顔を覚えて頂きありがとうございました」という添え書きがあるのに若笑したが、改めて振り返れば、学生が急激に増えた今では、努力をしても、学生の名前と本人を一致させることのできない場合が多い。四年制大学になっての初代学長廣池千英先生が、四月の入学式前に、その年に入ってくる学生の顔と名前を全部覚えておられて、新入生が桜並木で先生に出会ったときに突然名前を呼ばれて驚いたというエピソードは、いまでは遠い昔のことになってしまった。私などは、すれちがう学生に見覚えはあっても、名前がでてこない。たまに自信をもって名前を呼ぶとまちがっていて失笑をかうこともある。いじわるな学生が、「先生、覚えていますか」といって近づいてくるときなどは、ぞっとしてしまう。そのような状況の中でも、学生一人一人は、それぞれに認知されることを求めている。「おい、やってるか」とか「困ったことになっていないか」とか「頑張っているじゃないか」とか。そして、そんなことをきっかけにした教員とのより親密な交流の中で、学生は安心して学生生活を営み、麗澤精神の土壌を耕してゆくのである。語学関係の比較的小さいクラスで担当の教員から言葉をかけられたり、コメントや小言をいわれたりすることがきっかけになることもあろう。さらには、三年次、四年次の専門ゼミナール・卒業研究のグループの中での指導教員との交わりが、専門研究という、知的活動、学問的研究の中核として重要であるのみならず、人間的な交流のもっとも大切な場の一つにもなっている。何かを教え諭されるというよりは、その中で知らず知らずのうちに感じとってゆくもの、多くの場合、のちになって気づくようなもの、麗澤精神と呼べるものの基盤を身につけてゆく。外国語学部で、平成八年度から一年次生全員を対象にした「教養ゼミ」を取り入れるのはこの認識の延長線上のことである。

学生にとって大学生活は教員との関係が中心であるとは限らない。学生寮に入っているもの、部や同好会、サークル等で活動するものも、真摯であればあるほど、いわゆる「ノブレス・オブリージュ」の学生時代版を経験しているといってもいいかも知れない。「なぜ自分だけがこんなに苦労しなければならないのか」と。それだけに、彼らに対する認知が大切である。それが激励になるし、支えになる。わが学生たちは、また、実際によくやってくれていると思う

ことが多い。昨年の十一月に、水野ゼミの学生を中心にした、学生たちの創作劇「ぼくのばあちゃんボケ老人」が柏市の文化ホールで上演された。これは上演前に殆ど全ての新聞の地方版でとりあげられて麗澤大学のPRに計り知れない貢献をしたが、そのことは措いて、この劇の出演者たちに、後に、校舎とか研究棟の中などですれちがったとき「よかったよ」と一言いうと、「ご覧になったんですか」とはにかみながらも、顔を輝かせたものだ。劇ということになると麗澤大学英語劇グループがある。この六〇年の歴史を誇るグループには、ずっと以前のある一時期、直接的にかかわっていたということもあって、私はいつも関心をもって陰ながらの応援をおくっているが、このメンバーたちの努力、役者たちの練習もさることながら、とくに裏方たちの、孜々として働く姿を見るとき、それは暑い夏の日であったり、晩秋のうすら寒い夕闇の中であったりするが、私はいつも胸に熱いものがこみあげてくるのを禁じえない。ときに騒々しいと批判され、ときにキャンパスの取り決めからはみ出していると小言を言われながら、そんなときにも「好きなことをやっているのですから」と恐縮をし、決して、大学のため、見にきてくれる人のためにやっていることだから大目にみてほしいなどと言い訳はしない。この諸君の姿を思うとき、ここにもいわゆる「ノブレス・オブリージュ」の精神を磨いている若者たちがいるのだと思うのである。それはたまたま英語劇グループのことだが、私の知らないもっと多くの諸々の活動、もっと大勢の人々がいるにちがいない。寮や学友会の役員の諸君、麗澤フィルのメンバーたち、その他、表舞台に出たり、陰に引っ込んだりしながら頑張っているこういう学生諸君に期待のまなざしを向けていられるのは無上の喜びである。

どういういきさつでそうなったのか覚えていないが、私はゴルフ部の顧問を仰せつかっている。学生と一緒にプレーをするのも私のたいせつな職務の一端なんですと、冗談めかして言うことがあるが、内心私は本気でそう思っている。自分自身の学生時代を振り返っても、先生に遊んでもらったこと、それは大人としての対等の付き合いをしてもらったということになるが、その思い出がいちばん心に残っている。それは愛着になり、いろいろな場で心の支えになる。心のゆとりになる。残念なのは、最近学生とのゴルフに割くことのできる時間がなかなかとれず、それと生来の不器用さとが重なって技術は衰える一方で、これでは新入部員の見本にもなりはしないというわけで、この名誉ある地位を追われそうな雰囲気がそこはかとなく感じられることである。

古くて新しい人口問題

――深刻化する人口問題――

国際経済学部教授
河野（こうの）　稠果（しげみ）

人口問題というと日本では人口高齢化・少子化、そして首都圏・阪神圏・中京圏に対する過度の人口集中、あるいはその対極にある農村における過疎の問題が挙げられる。しかし世界全体をみると、世界人口の爆発的増加、それによる貧困の増大、環境破壊が進行しており、この方がメジャーな地球的規模の人口問題である。日本にみられる出生率の非常な低下と人口高齢化は、それ自身として大問題ではあるが、メキシコの人口にほぼ匹敵する九三〇〇万人の人口が毎年新しく加わって地球の収容力に負担を増している現状と比較すると問題にならない。しかも世界の人口増加の九二％は貧しい途上地域で起きていることが、事態の深刻さを増幅している。

このような状況を背景として、一九九四年にカイロで国連主催人口・開発会議が開催された。もっとも国連主催の人口会議は十年に一度の割合で過去一九七四年のブカレスト、八四年のメキシコ市と二回開催されているが、九四年のカイロ会議は一番前評判が高かった。地球環境問題がオゾン層の破壊、温暖化、砂漠化、酸性雨と世界各地で深刻になり、しかもその重要な原因の一つとして世界人口の激増があることが、各国政府、ジャーナリスト、学者、一般市民の間で広く認識され始めたのであろう。そして会議前に女性の権利、リプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）を主張するフェミニスト・グループと、保守的な家族の倫理を守り、中絶の容認に反対するバチカンやイスラム諸国との思想的対立がマスコミによって増幅され、一般の関心を呼んだという事情もある。

〈古くて新しい人口問題、そして人口論〉

人類の祖先は今から約四百万年前アフリカで発祥したといわれるが、この四百万年の歴史は常に乏しい生存資料あるいは資源を求めての、あるいはそれとのバランスの上に立った人口問題の歴史であったろう。また今年から数えてちょうど二百年前の一七九六年に、マルサスは有名な『人口論』の初版を江湖に問うているが、マルサスの人口論に述べられた基本的考え方は、プロト産業革命の科学技術の発展を無視したものだと一旦は否定されながらも、ローマクラブの『成長の限界』、ポール・アーリックの『人口爆発』、あるいは国連人口基金の『世界人口白書』に新しい形をとりながら現れている。

一方、マルサスとほぼ同時代の一八世紀には、イギリスにはゴドウィン、フランスにはコンドルセという思想家がいて、科学の進歩と人間の英知に全面的信頼を置いた議論を展開していたことは周知のとおりである。彼等に従えば、科学技術の発展がある限り人口問題は解決され、地上に王道楽土が建設されることになるが、この手の考え方は今も根強く、一九七〇年代から八〇年代にみられたハーマン・カーンの『次の二百年』やジュリアン・サイモンの『究極の資源』、あるいはエスター・ボザラップの『人口と技術移転』に形を変えて再現している。彼等の考え方は、人間は環境の変化に対して適応能力を持った存在で、自然条件が悪化した時に、「必要は発明の母である」といった工夫、努力がなされ、人口問題を解決して来たし、人間の英知は現在の悪条件をも克服するだろうという発想である。

マルサスに始まった人口論は以後二百年の間、絶えず起こる経済社会の変容と自然環境の変化の過程で、悲観論と楽観論（あるいは悲観論の修正）の間を揺れ動いて来たともいえる。現在はふたたび悲観論が優勢で、特に日本ではその傾向が強いが、それに対する反論あるいは修正論も十分成立し得る。マルサス的人口論とその修正主義者との角逐の経緯を紹介することは、ともかく悲観論によって押し流され、レスター・ブラウンのような誇張された所説が必要以上にもてはやされる現在の状況に再考を促すよすがとなるかも知れない。

〈人口増加による悲観論と修正主義〉

先にも述べたように、人口増加はマルサス以来ネガティブに把えられることが多い。一九五〇年代、六〇年代の議論として、発展途上国においては、人口増加、特に急激な人口増加は開発の遅滞と生活水準の向上を阻害するものと考えられた。戦後の途上国は、一方では高い出生率によっ

て特徴づけられながら、他方では欧米諸国からの医療技術、医薬品の移入によって乳児期死亡率が著しく低下した。いわば途上国は欧米から wealth はもらわなかったが health はもらったといわれる状況である。この結果、急激な人口増加がみられるようになった。多産多死から多産少死への転換は当然巨大な年少人口を途上国にもたらした。そこでその育児・教育のための経済的負担は膨大なものになり、せっかく蓄積した農業生産からの剰余分はそれによって食い潰されてしまう。なかなか経済社会開発のための余裕は生まれない。これが一九五八年に出版されたコールとフーバーの書物の主要テーマであり、一九八四年メキシコで開かれた国連人口会議のために世界銀行がまとめた開発報告の主旨であった。

しかし、時代はめぐり、一九八〇年代前半のアメリカは、この人口増加による開発阻害論が、前述の『究極的資源』を書いたジュリアン・サイモン、そしてサミュエル・プレストンとロナルド・リーの主催した米国学術会議人口・人口学委員会によって手ひどく批判された時代である。人口増加は経済発展に必ずしもネガティブな影響を与えない。むしろ適度な人口増加は経済発展に有効であるとの人口増加有益論が、一時的にせよ優勢になった時代であった。前述のコール＝フーバーの著作や世界銀行一九八四年報告書で強調されたところの人口増加が開発にブレーキをかけるという主張は、実証的なプレストンやリー等の研究によって必ずしも正しくないことが明らかにされた。アレン・ケリーの人口増加率と一人当たり平均国民所得の比較の研究によれば、両者の相関関係はきわめて希薄であると結論されている。

一方、高密度で増加の著しい国々の中では「必要は発明の母」を地で行く農業技術の革新、組織の合理化、資源の代替利用が行われ、人口増加が経済発展を逆に促進する効果もあることが指摘された。人口増加に関する悲観論がしばしば引用する食糧窮乏論や石油涸渇説も、それならばなぜ世界的にみて食料や石油の価格が近年下落の一途を辿るのか不明であると批判された。

ここ十年間レスター・ブラウンは世界の食糧危機説を唱えている。最近は中国の食糧不足を予言し、巨大な人口を抱える中国が食糧生産不振によって大量の穀物を外国から買い付けることになれば、世界の食料の価格は跳ね上がり、また世界全体が飢え始める端緒になるだろうという。しかし、彼が世界の食料生産が一九八六年を分水嶺として低下し始めているという状況を地域別に祥細に考察すれば、そ

れは世界の穀倉といわれるアメリカが減反政策をとっているからであり、同様なことが南米のアルゼンチン等の農業生産国で顕著に起きているからである。また中国の食糧不足についても、農業技術的にまだまだ反当たりの収穫量改善の余地は十分にあるとする研究者。識者の反対意見もある。もし食糧不足がはっきりしてくれば、中国政府は食糧生産のための技術的、財政的努力をもっとするはずであり、このまま座して食糧不足を待つことはないだろうとの意見もある。ブラウンの計算は農業生産性をあまりにも低く見積っているし、資源・財源の代替利用という観念に乏しい。

〈地球環境破壊論の登場とコメント〉

一九七二年にローマクラブはMITのメドウズほかの協力を得て『成長の限界』という報告書を世に問うた。これは人類がこのまま人口増加と経済成長を続けるならば、二〇五〇年くらいまでに人類のコントロールを超えた破局的状況を迎えるというものである。特に、それまで人口問題を対資源、対食糧供給との関連においてのみ考えていた人口・経済、学者にとって、工業化、都市化、近代的大量消費が環境破壊を進行させ、人類の滅亡にまで及ぶとするこの『成長の限界』の知的衝撃は強烈であった。その後この報告書は色々な点から批判されたが、過去十年くらいの間にまた再評価される動きが見えている。

それは一つは地球環境破壊がこれまで以上の規模で進行し、特定の国とか地域を超え本当にグローバルな広がりを持つようになったことであり、もう一つは途上国の人口増加が環境悪化を急ピッチで促進していることが明らかになって来たからである。

一九八〇年代初期に南極大陸上空でオゾン層に大きな穴が開いていることが発見され、人々は愕然となった。そして地球の温暖化、酸性雨、砂漠化と土壌浸食、野生生物種の減少がこれまでの予想を超えた規模と速度で進行していることが判明した。さらに途上国の人口圧迫は、本来農業牧畜には不適当な場所にまで及び、森林を伐採し、山を切り抜いて砂漠化、土壌の流出、山丘崩壊を招来している。途上国の都市には農村の人口圧力のため押し出された職のない人達がスラムを形成して住みつき、燃料は薪しか利用できないため、周辺の森林は代採し尽くされている、と報告されている。

しかし、多くの米国の経済人口学者は、現在の地球環境破壊はこれまでの先進国の大量生産・大量消費のつけで、人口増加の効果は比較的小さいと冷静である。彼等は環境破壊は人口増加よりも環境保全管理体制の欠如に原因があ

るとみている。彼等は、これまで無料だと思われていた大気、水、森林、地下資源を内部経済化し、その利用にコスト・料金を課せば、代替利用と環境管理化を促進すると考えている。

＜一つの朗報＞

一つだけ明るい話がある。それは最近アフリカを除く途上国で出生率が予想を上回って低下したことだ。このままで行くと世界人口は百億以下で収まるかも知れない。しかしそれでも現在の地球人口の約二倍である。日本も途上国の人口問題の援助に物心共にさらなる援助をする必要がある。日本の経済は世界が平和だからこそ成り立つ。途上国での人口問題は戦争に直結していることを、我々はもっと認識すべきであろう。

異文化コミュニケーションとトレーニング

異文化コミュニケーション研究会（SIETAR JAPAN）会長
麗澤大学国際経済学部教授
八代　京子

異文化理解が教養の一端であったころは、それが知識のレベルだけの理解であってもなんら深刻な問題は生じなかった。ところが今日では、異文化理解は教養の範囲を越えて、生活のあらゆる現場で必要になってきている。今日、私たちが異文化理解と異文化コミュニケーションを問題にするのは、異文化接触が日常的に起こり、実際に刻々と異なる文化の人々に対応していかねばならない状況が生じているからである。

異文化に関する豊富な知識は、異文化理解とコミュニケーションにとって必要不可欠なものである。自分の経験に限られた知識しか持たない人は、今までと異なる状況に陥った場合、当然対応を誤るであろう。したがって、自分の経験から学ぶと同時に、できるだけ豊富な知識を身につけるよう、異文化に関する書物を読んだり、テレビ、ラジオ、新聞などから情報を得るように心がけねばならない。また、異なる文化で生活してきた人々から生の情報を得ることも大切である。

しかし、いくら豊かな情報を持っていても、実際の異文化接触の状況で適切な対応ができるとはかぎらない。これは、異文化に関する知識だけでは、異文化への適応、異文化への対応を正常に行う能力が身に付かないということを明確に示している。

今までの異文化理解教育は、一般的な情報または学問的で抽象的な知識の面に重点をおいたもので、実際の異文化の人々とのインターアクションに焦点を当てていなかったきらいがある。すなわち、与えた知識をいかに異文化コミュニケーション、異文化接触の現場で活性化するか教えていないのである。知っているというレベルと、実際の状況を正しく解釈

し、適切な行動がとれるレベルは違う。これからは、このギャップを埋めるもっと実践的な異文化理解および異文化コミュニケーションの教育が必要である。それゆえ、異文化のいろいろな違いに気づく感覚をみがくこと、異文化対応のスキルを養うことなどを目的とするトレーニングが注目を浴びるようになってきたのである。

異文化トレーニングでは、頭（知識）、心（感情）、手足（行動）を万便なく動員してトレーニングを行う。従来と違って、感情と行動が加わっている点が重要であるが、これら三つの要素が全て含まれていることが不可欠である。行動に重点を置きすぎたり、感情だけを扱うトレーニングは有効ではない。実際にトレーニングを行ってみると明らかにわかることは、必要な情報を与えないで、感情や行動を扱うトレーニングは行えないということである。

頭を中心にしたトレーニングは、文化一般または特定の文化に関する正確で的確な情報を与えるものである。たとえば、西洋文化と東洋文化の比較のような抽象的で高度なものから、相手国と相手文化に関する地理、政治経済、治安、学校、環境衛生、人種、交通、食べ物、買物などの日常生活に必要な情報を与える。これには、従来とあまり変わらない講義形式が用いられる。

感情を扱うトレーニングは知識を前提としており、代表的なものとしてはいくつかの誤解や行き違いの事例（クリティカル・インシデント）からなる異文化疑似体験集（カルチャー・アシミレター）がある。クリティカル・インシデントでは、異文化摩擦や誤解の実例を提示し、その状況をいかに解釈し、評価し、判断するかグループで検討し合う。このとき、異文化摩擦や誤解の状況で自分だったらどのような感情に陥るか、それはなぜか、相手はどのような意図でそのような行動をとったのか、互いに相手の意図が理解できなかった理由は何か、互いに相手の意図を正しく理解できたならどのような行動をとればよいのかなどを話し合うのである。この過程で、自分やグループの他のメンバーの一方的な価値判断に基づく感情的な反応がかなりあることに気づくことが多い。

私は麗澤大学に赴任してから、麗澤大学から海外の大学に留学した学生を対象にクリティカル・インシデントの研究を行い、その結果を一冊の本にまとめて研究社から出版した。全編平易な英語で書かれたこの本にはクラスでの授業態度、寮生活、ホームステイ、危機管理など、二〇のインシデントが収録されている。この本を授業で用い、学生の実践的な英語力と異文化コミュニケーション能力を育成するのに効果をあげている。

行動を伴うトレーニングは、当然ある程度の知識を前提としている。また、感情も豊かにかかわってくる。たとえば、タッチング（さわる行為、接触）によるコミュニケーション・スタイルの違いを体験学習する場合、自分では思いもよらないほど、感情的な反応が沸き起こることがある。簡単なエクササイズとして、挨拶の仕方を実演してみるとよい。お辞儀に慣れた私たちには、握手、特に初対面の異性間での握手はちょっと違和感が伴う。さらに、互いに抱擁して頬にキスをするラテン文化での挨拶は同性間でもかなり抵抗がある。行動を伴うトレーニングでは実際にこのようなことを実演してもらう。これは、現地に行ったら現地の人がするように行動しなければならないと指導するためではなく、自分がそのような行動の受け手またはやり手となった場合にどのように反応するかを知るために行う。さらに、どうしても、相手文化の挨拶の方法を用いたくない場合は、どのようにして失礼のないように対処したらよいかも同時に実演してみる。すなわち自分がどのように感じ、反応するかを知ること（自己気づき）が第一の目的であり、次にある行動の異なる文化での意味付けを理解すること（異文化気づき）につなげていくのである

異文化コミュニケーション能力を育むためのトレーニングで最もインパクトの強い活動として異文化シミュレーション（疑似体験）がある。今までに学生や社会人を対象にシミュレーションを行ってきたが、異文化理解とコミュニケーションだけでなく自分を知るためにも大変役に立ったという感想が圧倒的に多い。通常、異文化シミュレーションでは、人工的にある文化を作りあげ、その文化の中へ参加者を導入していく。その文化にはかなり複雑なルールがあり、参加者はまずそのルールを学習する。次に、参加者がしなければならないタスク、即ち仕事、が設定されている。その仕事を成し遂げるために参加者同士活発なコミュニケーション活動を展開する必要が生じる。参加者はこれらの活動に主体的に関わることにより異文化で生きることを疑似体験するのである。

私は、異文化コミュニケーション研究会（Society for Intercultural Education, Training, and Research, JAPAN）及び SIETAR International というワシントン D.C. に本部を置く学会の専門家のグループと共に、日本人とアメリカ人がビジネス交渉をするとき遭遇する摩擦や誤解をどのように未然に回避することが出来るか、そのスキルを身に付けるためのエクササイズとしての国際ビジネス交渉シミュレーションの開発にここ数年携わっている。このティームは日米の異文化コンサルタントおよび学者からなり、今日まで内外の学会、大学などで研究成果を披露してきた。シミュレーショ

ンは学生、ビジネスマン、公務員など対象を異にして行う度に思いも掛けない反応があり、実に研究のしがいのある奥深い分野である。研究の成果は国際経済学部の授業、「国際コミュニケーション」でも活用している。

現在、異文化コミュニケーションの分野で早急に必要とされているのが、日本人と他のアジアの国々との間で円滑なコミュニケーションを行うためのスキルである。私たちの研究会でもこの問題に関する盛心は大きい。ところが、残念なことにアジア各地でビジネス交渉に明け暮れるビジネスマンが多いのに、この問題の研究者はほとんどいないのが実状である。アジア地域との経済的相互依存が急進する中で摩擦や誤解が頻発している。円滑なコミュニケーションを可能にする教育は緊急に取り組まなければならない課題である。

以上述べてきたのは、主に実践的なコミュニケーション能力を育むためのトレーニングについてであるが、コミュニケーション理論も決して軽視されるべきではない。コミュニケーション理論の学習はコミュニケーションが何であるかを理解するために必要な基礎的知識である。さらに、コミュニケーション理論の知識が有ってこそ、異文化トレーニングで習得したスキルをステレオタイプ化することなく、広く他文化理解に応用することができる洞察力を養うことが出来るのである。

文献

八代京子、ジョウン・ハウデン Study Abroad 研究社出版
八代京子「異文化理解教育とトレーニング」本名信行他編
『異文化理解とコミュニケーション 2』三修社出版

〝アジアへの貢献〟について考える

外国語学部教授　竹原　茂
（旧姓　ウドム・ラタナヴオン）

一、はじめに

私が日本の教育界に関係してすでに三十年近くになる。最初は一九六五年四月から一九七〇年までの日本留学を通じて体験した教育であるので、それは受け身の教育といえよう。

その後、ラオス政府関係の仕事や、日本青年海外協力隊、アジア経済研究所、外務省、アジア福祉教育財団（難民事業本部）、東京外国語大学、麗澤大学、その他日本各地で教育に関するさまざまな講演活動を通じて、いわゆる体験的発信の教育を推進してきた。後者の方は、まさに「アジアへの貢献」もしくは、アジアへの理解教育に重点をおいたものと思う。

しかし、こんな不安な時代に日本の青年男女に教育をすることは楽ではない。教育をめぐる問題はいつも新しくて古い。まぎれもなく時代の刻印を帯びて現れるが、問題はいつも同じだ。一九七〇年代には、落ちこぼれ問題が始まって、偏差値教育の弊害、やがて校内暴力、非行、登校拒否、いじめというような問題が毎年のようにエスカレートした。いったい、どうやってこれらの教育問題を解決する特効薬があるのか。なぜ、このような教育の問題が発生したのか。私は、この深刻な問題を解決する糸口として、自分の専門とする「アジア学」の視点から考えてみることにした。そして今回、わずかなスペースで全体の問題解決の方法論をのべることはできないが、日頃の学生指導や課外活動から私の体験をおりまぜて考えてみたい。今、なぜ「アジアを理解し、貢献しなければならないのか」、特に戦後五十年の年にである。

二、アジアの中の日本

一九八五年以後の世界に、急激に変化を見せた、社会主義諸国の市場経済開放政策によりかなりの早いテンポで国を発展させ、特にアジアの中でもっとも注目すべき国々はやはり、ASEAN諸国である。その他の国としては、中国、台湾、香港、韓国いわゆる“THE FOUR DRAGONS”である。これらの国々の経済発展ブームに沸き立つアジアの活気を日本は先進諸国の中でいちばん身近に感じていると思う。今、日本の対アジア貿易とほぼ肩を並べた。日本の若者は、アジアの人気ロック歌手や、言語についていくらか高い関心を見せた。最近、大学では、中国語や、タイ語、四年前に東京外国語大学では、史上はじめてラオス語科を設立したほど、ベトナム語、カンボジア語、ミャンマー語、モンゴル語を学びたがる学生がふえてきた。うれしい光景になってきたものである。わが麗澤大学にも、近い将来、もっとアジアの言語をとり入れるべきだと思う。日本の若者はアジアの言葉ができれば、自然にアジアの文化、社会、経済について興味をもってくれると、私は信じている。そうすることによって、若者はアジアに貢献してくれると思う。その結果戦後五十年の心理的問題についても、ごく自然に時代と共に解決していくと思う。

なぜなら、若者は他のアジアの若者と交流し、「共に寝食し、一つの屋根の下で、同じ釜の飯を食べて、普通の生活を体験する」という人間同士のこころのふれあいから生まれた友情を育てることができるからである。もちろん、政府のODA（政府開発援助）はアジアへの多大な貢献であるが、人間は、結局、最後にこころに残るのは、やはり、若いとき体験したことだと思う。ですから、私は毎年のように麗澤大学の学生数人をタイ、ラオス、ミャンマーなどへ連れてゆき、体験旅行をし、さらに毎年、麗澤大学の文化祭に必ず、タイ、ラオス料理や展示を学生と共に開催して参加したのである。それに、豊かさの中で育った若者に、真の豊かさを知るために、私は「難民問題」、「貧困問題」にとりくんできたのである。

このように人間に直接関係する問題をアジアの国々で直視し、体験できることは何よりの教育であり、真の国際交流、国際協力の原点だと確信している。開発教育の部門は広いが、数年前に、麗澤海外開発協会とモラロジー国際救援運動推進委員会（MIRC）を通じて、世界、特にアジアの仲間たちに多大な貢献をしてきた。その他、麗澤大学内には一九七七年から「難民問題」について、教養知識として学生に講義し、一九八九年より「学生難民問題研究会」サークルとして認められた。学生の活動としては二週間に一度勉強を開き、テーマに基づいて各自が調べてきたことを発表し、

意見を交換し合ったり、難民に関するビデオを観たりして、難民に対して正しい知識を養っていく。また、勉強会以外にも難民を助ける会の〝毎年〟ＮＨＫホールで行われる〝じゃがいもの会〟では、Ｔシャツやテレカ、その他の販売など手伝いをさせている。六月の〝伝統の日〟では、ＭＩＲＣ主催募金活動に参加させている。その他、学生と親睦をはかるため、自宅（大学の近く）でラオスやタイの料理を使って交流する。学生の人数が多い場合は、学校に持ってきて、みんなで食べるようにする。②日本国内定住難民の方々と盛んに交流をもち、他団体のボランティア活動にもできる限り協力させている。③犬養道子客員教授の集中講義（主に難民問題）に参加、学園祭展示などにおける調査、取材内容の報告や、難民、ボランティア、有識者の方々による講演会に連れて参加させるのである。大学の総合科目では「人間と国際理解」というテーマを通じて、学生に人権についてお話しをするなど、自分の実際の体験や、スライドやビデオ、などを紹介いする。上記の国内体験の他に、前にも少しふれてきたが、毎年学期末試験後、アジアの文化、社会に深い関心を持っている学生のみ（約十五名）「麗澤大学東南アジア研究会」の活動として、タイ、ミャンマー、ラオスなどへ約二週間連れていった。学生たちは、現地の事情を出発する前に勉強し、すでに予備知識があるていどあったので、視察中に何とか私の説明を理解してくれた。そして、一九八六年から北部タイのチェンライ県、メーコック・ファーム・プロジェクト・ジャパン（会長竹原　茂）で、現地の青年たちと植樹し、ファームの草とり、にわとりやあひるなどにえさをあたえたあと、ファームでとれた野菜を料理して共に食事し、交流してきた。宿泊するところは、もちろん、ファームの国際寮でとまる。この寮は、世界の若者の国際理解の場として、ＭＩＲＣが、援助金を助成してくれた寮である。この寮の他にも各方面の友人たちの理解と協力を得て、特に国際農林業協力協会、郵政省国際ボランティア貯金などからも多大なご協力があった。このファームの最初の資金はやはり、麗澤大学の学生と教員、聖学院高校の学生と教員からスタートしたものである。こうした開発教育により学生の目は国内はもちろん、広く世界にも向けてくれるであろう。

麗澤大学の教育原点つまり、麗澤スピリットは、「世界に貢献できる人材を育成するために、真の人間教育を行なう」にある。人間教育とは、つまり人権、道徳、人生、利他愛、国際理解を教えるためには、廣池学長がおっしゃった「高い専門性と道徳性を有し、かつ外国語を自由に使いこなすこと」である。「国際社会において信頼されなおかつ尊敬されうる国

際人の育成」こそが重要である。

アジアの中の日本を考える場合まさにあてはまることである。あるアジア出身者の友人はこう言いました。「日本が好きだが、愛せない」と。もう一人の友人は、「外国人の学者や企業のリーダーや学生たちは、たいていわが国の情報、資料などを得たあとは、何も開発に貢献していない。これはただの知識搾取だけじゃないか」ともらしてくれたことがある。先進諸国の人々は発展途上諸国の人々と互いに情報交換し、その後少しでも現地の人々の期待を裏切らないように協力するべきでしょう。今まで日本人は「脱亜入欧」の歴史が長く、近隣諸国の大変貌に無関心な日本人がたくさんいる。多くのアジア人の目には、日本はアジアの一員になる気があるかどうか、ただ、カネと市場を欲しがっているだけのように映る。日本人のアジアへの関心は、まだまだ底が浅い。近年、確かに日本では、アジアエスニック料理ブームとか、アジア映画ブームが起きているし、アジア諸国を訪れる日本人も増えた。だが、ある調査によれば、やはりアジア・オセアニア圏では、オーストラリアだけ。中国は八位にとどまった。「アジア美術という場合、一般に日本のアーティストは含まれない。その背景には、アジア人としての通底性を感じながら、自分がアジア人であることを認めたくない気持ちがあるから」という美術批評家の新川貴調氏は指摘する。だが、今のアジアはめざましい発展を見せた。三十年前のような「貧しい親戚」、「内乱のアジア」の気持ちをすてなければ、今までの日本がめざしてきた「脱亜入欧」では、おそらくアジア諸国からは歓迎パーティーを開いてくれそうな旧友はできないであろう。

マレーシアのマハティール首相が「アジア人の国だけで設立しようと提案している東アジア経済会議（ＥＡＥＣ）に日本の力を活用してほしい」といったというのであるが、しかし、日本は「ＥＡＥＣ」に参加するには、アジアで唯一、先進国首脳会議に参加しているアジア代表として、そこで論じられる問題に関するアジア諸国の意見を知らずに、アジアの代表といえるだろうか。日本の国連安保理常任理事国入りの支持問題にしても日本の責任とアジアへの基本姿勢を変え、アジアにもっと目を向けることと、信頼感を増す努力をすれば、アジアの友人が日本を支持してくれるであろう。上記のような問題意識を指摘したが、今は「日本は東洋にも、西洋にも仲間入りできず、独りぼっちになりかねない」という心配がある。アジア人同士の提言は、欧米人の提言より余り受け入れていないようですが、将来にはきっと役立つであろう。先日（今年の一月二七日）九州生涯学習センター（モラロジー研究所）の第九回公開講座で「アジアの中の日本」という

テーマで講演した。後日アンケートの（感想文）結果がとどけられた。いくつかの内容を紹介しましょう。①「日本人が外国に出て見た（外から見る）日本観ではなく、外国人（今は日本人ー私のことー）が日本の中にいて見る日本と、グローバルな視点から捉えた今後の日本のあり方についての純粋な提言には、一つ一つ納得させられ、先生のお人柄とも相俟って、深い感銘を受ました。本当に有意義な講演でした。」②「純粋で真面目で、アジアの中での日本は何をなすべきかについて、すばらしい講演でした。」、③「同じアジア人でありながら、日本人はアジアの人に差別的な見方をする。先生のお話を聞いて改めて反省させられた。アメリカナイズされた感覚をアジアに目を向け、アジアを、日本をもっと知らなければと思いました」などの感想をたくさん頂きました。

三、国際社会の信頼と尊敬される国際人の育成

麗澤教育は現代社会にとっても役に立つ教育をすすめている。なぜなら、人格教育を指導してくれるからである。ラオスの格言にあるように「人は、知識があっても、人格が（品性）なければ、社会に役に立たない」とある。今まで教えた学生たちは、皆、礼儀がよく、利他愛精神がある。学問的な知識や道徳心も高くなってきた。まさに、現代における混迷する社会状況にぴったりの教育だと思う。将来にはぜひ、麗澤大学の卒業生が日本のリーダーに立ってほしいのである。私自身、麗澤教育に感化され、今日まで勉強させてもらっている。廣池千九郎博士が生んだ偉大な道徳学は日本全国、そして全世界の国々に勉強してほしい。そうすれば、世界の人々は正しい心を持ち、余計な欲望や利己心がなくなり、平和な暮らしをおくれるであろう。国際社会の信頼と尊敬はそこからはじまるのである。麗澤大学ではその目標をめざして、「品性教育」と「人格教育」に重点を置いた知徳一体の教育が行なわれている。

近年、国際的な視野や国際理解教育がさかんになったが、必ずしも明確な概念が説明されていない。そこで、私が、前述したように講義を通じて学生に国際理解の定義を述べ、スライドや、ビデオなどを利用して説明してきた。国際理解とは、「諸国の自然や産業・経済の理解にとどまらず、世界の異なった地域に住む人々の人種、民族、宗教から、それらに密接に関連する行動様式、生活意識、価値観などまで総合的に認識すること」である。これは、まさに「異文化の理解」の基本的な知識である。国際社会の信頼は国際理解から、つまり、異民族・異文化に対する誤解と偏見、異国で生起している様々な事象を自分の問題として捉えられない視野の狭さ、

などへの反省と啓発の意味である。国際人の育成も誤解されている。外国語が上手とか、海外生活が長いとか、欧米的な思考をもつとかを国際人と考えがちである。私は国際人とは「地球上に生息する動植物を大切にし、自分が国境を超えた一個人で、難民も含めた宇宙の中の一人旅人であることを悟り、常に身の回りの事柄に疑問を抱く批判的思考をし、またはそうしようと努力している人」だと思う。さらに言うならば、国際人とは「世界の人間と平等につき合える人間のことである。そしてそのような国際性が、海外に進出し活躍する者すべてに問われている。また、このように、外国にあって外国人と接して、相手を蔑視するのでもなく、また、劣等感を抱くのでもなく、平等につき合うことのできる者にとっては、カルチュア・ショックはそのショックの度合いも低く、異文化の社会で問題なく生活できる」のである。

麗澤大学では上記に述べたように、アジア諸国、あるいは世界の国々と平等につき合える人間を育成していきたい。中国残留孤児、難民問題、海外体験旅行、阪神大震災ボランティアなどを通じて、麗澤大学学生は、社会参加意識が高く、社会問題を身近なものとして受け止めている学生が確かに毎年増えてきた。今後、国内のボランティア活動ができる大学のカリキュラムが実現できれば、老人ホームや、身体障害者、農業（農作業）などの方面にもボランティアができれば、学生はもっと人生に対して、または、人間としてどんなにか強くなるでしょう。思いやり教育は、このようなボランティア精神から生まれる。人間教育は、ただ、知識や学問だけを追求すればよいとは思えないし、ゆとりある時間を学生に与えるべきでしょう。「人生というふしぎな過程の中では、無意味なもの・無価値なものは何ひとつない」と遠藤周作氏がいうとおりである。豊かな社会がこのような教育を忘れてしまったのは、残念に思う。先日、国際協力事業団（ＪＩＣＡ）の「二一世紀のための友情計画」に招へいされてきたラオス青年教師（二十名）、カンボジア（三十名）、ミャンマー（二十名）、モンゴル公務員（十名）計、八十名の歓送会（都内のホテルで）に出席でき、ラオス語、ミャンマー語、カンボジア語通訳で手伝いしている早稲田大学・東京外国語大学の女子学生の姿を見てうれしかった。今後麗澤大学に東南アジア語学科（ラオス語、タイ語、カンボジア語、ミャンマー語、ベトナム語、インドネシア語、マレーシィア語など…）ができれば、日本の若者は、きっとこれらの言語でアジアの若者と communicate できるでしょう。アジア人同士ですから、できれば、アジア言語で communicate していきたいものである。

演劇と教育と生活

日本芸術文化振興会　国立劇場調査養成部　主任専門員　杉本隆一

学びの自覚と生活の自覚は、知的な活字文化に触れる世界と映像・放送文化に流されている世界に大別されますが、四〇年前はそうではなかったと思います。放送文化は教養的であり、生活に潤いを与えていました。活字文化は政治支配を脱することができず、騒乱と勢力競争の不毛な一時期でした。では八〇年前はどうだったか、考えて欲しい。一九一六年前後のことです。

活字文化は揺籃期であったろうか、台頭期であったろうか。放送文化はシネマ文化に遅れており、映像は一歩抜きん出ていたということができます。それでもレコードの存在は忘れることはできません。演説会場は満員、芝居小屋はようやく映画に押され、活動弁士（活弁）は寵児だった。流行（はやり）歌が巷に流れ、世界の情報はいながらにして無線通信によってもたらされた。

当時の新聞を読んでみるといい。そこには生の歴史が息づいている。

しかし、それもあなたが歴史を学んでいるから見えることだと、私は思います。学びの基本は歴史を学ぶことに始まり、自ら歴史を綴ることによって終わるということができます。日記、手記、体験記、実験記録、報告書、探検記、観察録等だけでなく、家計簿、取引簿、速記録、イラスト、絵画、その他。

それから小説、写真あるいは単なるメモといった記録されたものだけでなく、「しゃべること」、「表現すること」の全てが自らの歴史であり、人生だからその重みを実感して欲しいのです。

一九六〇年にソニーは当時としては画期的な7インチリールを使用できるテープレコーダーを発売しました。語学練習には鬼に金棒です。自分の言葉を録音して聞くことができる。先生の発音を録音しておけばいつでも再生できる。音質に問題があろうが、なかろうが、録音自体が珍しかった時代でした。

今日では、手軽にVTRを利用して豊かな映像を楽しむことができるようになりました。テレビ録画したり、再録したり、あるいは直接ビデオ採りをして記録を作ることができます。が、それらの資料はほとんどの場合生かされていません。

どうしてでしょう。あなたは宝の山に気がついていないのです。語学を学んでいるあなたが、外国文化を吸収しなければいけないあなたが。情報量は膨大であると、聞いたことはありませんか。金を掛けるだけでは、いや、金を掛けることもいいでしょう、だが、自分の学び方が間違っていないか、どうか一度考えてみてください。デスクの資料整理、分析、総合化が必要な時期ではありませんか。

標準語は力を失っています。NHKことばには人気がありません。でも日本語（国語）は今、生き生きと躍動しています。あなたが学ぶべきは King's English でなくとも、北京語でなくとも、 das Niederdeutsche でなくてもいいのです。表現は力です。恐れることはありません。間違っていないとまず自信をもつことが大切です。意志をもってしゃべることが大事なのです。バイリンガルは難しいことではありません。イタリア等ヨーロッパの観光土産には少なくとも四カ国語が印刷されています。中等教育修了者ならそんな環境では自然に数カ国語の三千単語は覚えられるものです。インド紙幣には幾つの公用語が印刷されているか、見たことがありますか。

でも、考えてください。記憶するだけ、しゃべるだけ、理解するだけが学問、少なくとも麗澤教育の全てではないのです。真似・模倣から始まる全ての人生でも、確かに人間は豊かになり、文化を形成しますが、文化創造には一歩も近づいてはいないのです。自分自身を紡ぐこと、振り返ること、思考することが大切なのです。紡ぐとは、反復すること。振り返るとは、整理分析すること。思考するとは、組み立てることです。そして、自己に反省を心掛けてください。

君の発音はおかしい、といわれて照れることはありませんか。逆です。おかしいと分かってもらえることを幸せだと思うことです。それが今一歩の前進となるのです。

親を、両親を疎ましく思ったことはありませんか。生きて行く人間にとって一番必要なものは庇護者です。経済だけの

ことではなく、教育者としても、先達としても、掛け替えのない指導者ではないかと私は信じています。

五〇年前には、片親の子、身無し児、家なき子が大勢いました。疾病、戦争、自然災害等が次々と起こっていました。死病といわれた結核、コレラ。日露、日中、太平洋戦争。関東大震災、洞爺丸事件、伊勢湾台風。私たちは試練があって初めて本当の自分が分かるのでしょうか。試練がなければどうでしょうか。あなたは、自分に生きる目標がありますか。明日の目的をもっていますか。

良き友人となってくれる。腹蔵のない話のできる親友があって、力になってくれる。篤い信仰によって結ばれている。何時からのお近づきですか。家庭の伝統を考えたことはあるでしょう。一間の生活でも、二人の生活があれば、暖かさが違うものです。

周りに一人暮らしの老年者はいませんか。人と人とを比べると多くのことが吸収されます。でも欺瞞者がいないとはいえません。背徳者も同様です。そのような人に注意もしなければなりませんが、多くの場合、あなたとは違った世界を生きている、歩いている、渡っている人だと思って間違いありません。

普通の生活をしていると一日に何度も挨拶をしますが、それは狭い世間だけのことです。人の集まるターミナルで、デパートで、遊園地で人生を感じたことはありませんか。

歴史の中に身をおいても、歴史を理解することはまず、無理だと思います。ちょうど、阪神大震災の瓦礫の中で自分自身が分からないままに幾日も懸命になって働いていた人達が大勢いたということが伝えられていますが、どれほどの大災害であったかは、私たちと同様にマスコミ報道によってはじめて分かったことだといわれています。歴史の流れも世界と同じ空間にあるのです。地球の、世界の出来事も歴史と同じ時間の中にあるのです。人生行路はこの空間と時間の中に生かされているのです。見ることも、触れることもできない空間時間の狭間に生きているのです。

人間は色々の物を発明し、創造してきました。宗教もその一つです。言葉も重要です。だが、人間が人間としての尊厳を保つことができたのは、教育のお陰であり、演劇のお陰ではないでしょうか。お金を払って観る芝居だけでなく、毎日対峙している人間同士は、演劇世界の登場人物なのです。手話で語り合う人達、ベンガル語で怒鳴りあう人達、恋人たち

のささやき。

大金物ちがスッカラカンの貧乏人になり、名もない若人が名誉と、地位を得ることのできるのも教育のお陰であり、演劇をよく理解することができた結果だと思うのですが、いかがでしょうか。

歌は上手ですか。ダンスはどうですか。パソコンはやっていますか。パチンコはどうでしょうか。自由な生活も親を真似し、近隣の環境に親しんで身についたものでしょう。言葉づかいも同様です。階層社会では、語彙、アクセント、表現力の違いから瞬時に判断して同類同族意識を確認するそうです。

そんな世間から脱出し、新世界に羽ばたく、これが私たちの外国語の学びへの最初になるのですが、自己世界の確立には本物を真似る、本物に学ぶことができるかどうか、人生の岐路にあるところです。あなたを手引きしてくれるのは、千万巻の書籍ですか、週刊誌ですか、知人友人ですか、家族ですか。

先生は人生の手引きに程遠い存在になりました。なぜなら技術指導量が増大する一方で、指導時間は短くなっているためです。しかも、大学では技術習得には力を入れますが、学校では人間生活を学ばなかった真面目人間に限って、優秀な人材だと持て囃される傾向が強く、教育者としてはいささか心配なことが多いのです。自由な生活を生きる意欲人間と与えられた食材だけで満足する素直人間とでは学び習う姿勢態度も違うのです。勿論、他のタイプの人間もいると思いますが。

言葉の歴史は、まだ記録されていません。歴史は記録だけではありませんが、人間表現を記録することは不可能と考えられていました。だが、今日では姿勢表現はいうに及ばず、人は静止態から活動態までさまざまな記録体が残されるようになりました。

自分が自分を見ることのできる時代になったのです。鸚鵡石や声色屋、さわり集や歌い本、経本や台本等がこれまでどんなにか大切にされたことでしょう。現代ではビジュアルなアニメーションや劇画本、VTRやLD、デジタルフィルムやコンピュータグラヒィックス等へと進んでいます。

でも基本は、人間の原体験なのです。今は、演劇と教育と生活の中のきらめいているものを捕まえるための期間ではないでしょうか。感性だけでなく、悟性だけでなく、理性だけでなく、神性だけでない、そのための努力を惜しまない日々が望まれます。（外国語学部ドイツ語学科昭和三十八年卒業生）

「寮教育」を考える

― 中・高生教育現場からのレポート ―

明徳義塾中・高等学校副校長　吉田順一

(一) 寮との関わり

最近いろいろな場で学校教育（中等教育）における寮の意義や寮教育の実践について話させていただく機会があります。今回はその概略の一端をレポートさせていただきたいと思います。

私の寮生活の体験は三十余年前の麗澤大学での四年間の寮生活です。当時の大学寮は、広大な広池学園の林に囲まれた閑静な自然環境の中にありました。

大学に入学する以前の療養生活の延長で、私はのんびりと読書と森林浴に恵まれた四年の間に身体も徐々に回復し、麗澤大学寮は心身共に私にとって蘇生の地でした。これが結縁（けちえん）となって卒業後教育に携わることになり、爾来三十余年今日に至るまで寮教育との関わりのなかで、中学高校一貫教育の場を与えられて来ました。

私の実感する「寮」の原点は、肥沃な土壌とそれを囲む雑木林、桜並木の巨木、木造の大食堂、そういうぬくもりのある広池学園の原風景のなかに、深い感謝の想いと共に生きています。あれからの長い時間、思考し、語り、ささやかに行じてきた私の教育作業は、その源流を探って行けば、恵まれた麗澤大学の自治寮と、そこで受けた知徳一体の教育に逢着します。そして、その時には考えも及ばなかったことですが、あの寮生活が、私のライフワークの中核となったわけです。

こういう立場から、寮というごく小さな教育現場での雑感を伝えさせていただきたいと考えます。

(二) 教育にあたる側

言うまでもなく、寮教育でその前提となるものは、日常の生徒の生活指導や教育に直接当る寮職員（寮母をも含めて）の資質と意欲です。

このことが最も大切であり、それだけに又難しい問題でもあります。

私は寮職員は単なる寮を管理する人ではなくて、全員先生と呼ばれる資質と資格を持っていることが望ましいと考えています。

その寮教員が、昼間、学校の教師としての通常の任務を終えて、夜間の寮の仕事に当るわけですから、寮教員はどうしても肉体的・精神的に奉仕とか犠牲というような重い負担のイメージに繋がってしまうようです。

どんなに立派で快適な寮舎を準備しても、寮教員が肉体的に疲れて充足した心を持てなければ、寮という存在そのものが昼間の学校教育の便宜をはかるための、一つの「付録」物でしかなくなってしまいます。

寮教員の生徒への積極的な教育が不在であれば、寮は生徒を収容して「義務的当直」をするという場所でしかなくなってしまいます。それでは本当の意味での価値ある寮教育は出来ないわけです。

ではどうすればよいかということを、現場の寮教員の立場に立って考えてみる事が先決となります。それには、寮教員にたいしての充分な待遇と、学校・寮の勤務時間の配慮をするということではないかと考えます。

この待遇といいますのは、寮教員の夜間勤務に対する不足のない手当や快適な起居の場所を提供するという単純な事です。

時間的配慮といいますのは、個人の時間と生活を大切にしたいという現代の風潮の中では、毎日教師が生徒と同じ寮舎に起居し、毎日寮務にあたるということは出来得れば勿論理想的な事ですが、実際にはなかなか難しい状況になってきているように思われます。

具体的には多人数からなる教員の集団を作り、その集団を複数名のグループに分けて、そのグループが週二～三日、寮の勤務にあたるという方法をとれば、個々の教員は疲れることもなく、活力をもって意欲的に教育作業にあたれるのではないかと考えます。

私が寮教育を始めた時代には、私も他の寮教員も寮内に家庭を構え、生徒と共に二十四時間生活して、先にも話しましたように犠牲とか奉仕とか、どちらかというと教条主義的な命題を課していたように思います。しかし試行錯誤を繰り返し、時代の変化と多様化の長い時間と体験を経た現在、この

ような考えに進んできたわけです。

私が高知学芸中・高等学校という中高一貫の進学校で創設した十二歳から十八歳までの生徒二百名を収容する養正寮が、三十余年間何とか存続してきましたのは、自分の考える教育を理解し実行してくれる意欲のある教職員集団に支えられていたということにつきると思います。

そのような恵まれた中にあったからこそ、未熟な教育理念と体験しか持っていなかった私が、昼間は週十八時間英語を教えながら、二百名の小さな「夜間学校」でもう一つの教育を目指し徳育と知育の接点を探ることに自分なりの自己実現を見出す事が出来たと思います。たまたま能力的にも高い生徒に恵まれて、寮生の中から難関校といわれる大学への進学者が多く、現在各界で指導的立場にたって活躍している事実が、知育の中の一面の成果と言い得るかも知れません。

今考えますとまだまだ徳育は充分な具体化がなし得ておらず、教育の表層のごく一部を耕したにしかすぎなかったと思います。今後更により深い土壌を耕すことが、自らの課題であると考えています。

このような体験からしましても、教育にあたる側への十分な配慮をする事がひいては寮教員の資質の向上にも繋がり、それが昼間の学校教育とは違った意味での、もう一つの教育が出来る根底となるのではないかと思います。

(三) 教育を受ける側

寮で生活する生徒にとって、学校を終えて帰ってくる寮は、心と身体の「安息」と「安心」の場であることが必須のものとなります。安息が得られるからこそ、毎日二時間くらい身体を動かして汗を流す、放課後の体育クラブの活動をも生かすことができます。一般に学校の寮という場合には集団生活による訓練の場という響きがあり、従来は収容所的合宿所的なイメージがあったようにも思われます。生徒の上下関係も上の者が下の者を慈しみ強い者が弱い者に、先に一切れのパンを分け与えるという寮風を作っていきたいものです。

二十一世紀の学校を取り巻く環境、社会情勢を考えてみますと、寮はハードな面からだけのものではなくて、「優しい」「温かい」「安心できる」生活の場であってこそ、「躾」、「規律ある生活習慣」という、家庭では難しくなってきている具体的な徳育の実践が出来る場となるのではないかと考えます。

生徒を昼間の学校活動の「集団」と「動」の生活から、夜間の「個」と「静」の生活に変えてやり、寮に帰れば生徒は自らが思考する時間と空間を持つようにならねばならないと思います。そのための寮室のレイアウトは「個室的集団生活」

が出来るようなものが望ましいと考えています。

次に毎日休むことなく行わなければならない事は、寮教員の「巡回」ということです。夜間に設定した学習を中心とした時間帯には、複数の寮教員が交代で静かに、ゆっくりとした気持ちで生徒の寮室を見て歩くということです。教員が部屋を静かに見廻ってくれることで生徒は安心感を得ます。

部屋着に着替えて机に向かう生徒の後ろ姿に、昼間とは違った生徒の姿を見ることもできます。これは又寮教員にとっても、多くのことを学ばせてくれる時でもあります。

昼間反抗的であったり感情が不安定であった生徒も、鎮まった寮の居室では、そのような姿は消えて、柔和な表情を見せるものです。そういう時の教師の一言が、生徒にとっては生まれ変わりや救いをもたらす契機となるかも知れません。

寮教員の巡回という、やる気さえ持てば誰でもできる平凡な作業を、毎日不断に続けることが、実は非凡な寮の教育実践の一つであると言えます。

そうした、ゆっくりと静かに思考のできる環境を生徒に与えた上で、勉強をするという、これも最も当たり前の平凡な「学習習慣」を徐々につけてやる事が不可欠のことではないかと考えます。

生徒にまったく学習習慣がついていなく、学校での授業がよくわからない―という現実では実際には教育の要諦である徳育に結びつけることは難しいことです。

寮の落ち着いた安心できる生活の場で、文部省の新しい学力観に取り上げられている、「自らで学ぶ意欲」や「思考力」を含めた、学習する習慣を身につけることが出来得ると思います。

知育は教育の必要条件であり、徳育の中核となる善悪や価値の判断力はその素地の上に育つものであると考えられます。きめられた時間一人で机に向かって学習するという生活の基本を寮生活の中心として考えさすことが最も大切なことです。教育の目標の一つである、「自立」もここから始まるのではないかと思います。

(四) 徳育の具体化

麗澤教育の究極の目標である、英知を基にした知徳一体、情理円満な人間の育成のため中・高生に具体的に日常の教育活動の中で、どのように展開して行くかということが、麗澤教育を受けた教師としての使命であると考えます。

徳は教えられない―と古代ローマの哲学者セネカの言葉にあるように、徳育は教育の理想であり知育を超える高い次元のものですが、それだけに現場の教育技術としての研究を深

めていかなければなりません。教師が生徒に道徳・倫理を、単に知識としてのみ、いかに重ねて説くよりも、教師自身の一つの道徳的行為に教育としてより高い価値があり、生徒に対してより大きい感化力があることは真実です。

師弟同行の教育のあり方は、特に二十四時間生徒が生活する寮の場では教員が常に確認しなくてはならないことですが、知識としての徳育を寮生活の中で生徒にどのように考えさせるかということのために、高知学芸中・高等学校で私が『養正寮の教育』と題して、開寮当初から生徒・保護者・教員のために提言した要覧の一部を取り上げてみたいと思います。

× × × × × ×

養正寮は規律ある団体生活を通じて、道徳的情操を培い、自律の徳を養い、その品性基盤の上に立って、学力の養成と大学進学を目指す知徳一体の英才教育を目標としています。

そのための実践理念として、「利他」「報恩」「友愛」「自己反省」を寮教育の中芯とするものであります。

『利他』

私たちの人生は自分だけの幸福や利益を追求するためだけにあるのではなくて、自分以外の人々とこれらを共に分ちあうためにあります。このような人生観に立つとき、本当の生甲斐が得られ人生の悦びが得られると思います。

寮という団体生活の日常の中で、自分の周りの小さな社会をこのための実践の場として自分を磨き、「利己的自我」から「利他的自我」への昇華に努力することです。これは又民主主義のもつ大切な徳目の一つであり、文明社会の構成と発展のための基本的課題であります。

『報恩』

自分という人間が生きて現在ここにあるのは、自分一人の力だけによるものではなくて物心両面お世話になった多くの恩人があるはずです。それらの恩人に対して御恩返しをすることは人間の持つ優れた叡知です。

人間は報恩の価値を知ることで人格が高くなります。特に、生をうけ今日迄養育を受けた親への感謝と報恩の実践は、幸福になるための要諦となるものです。

『友愛』

友人への思い遣りと温かい心遣いは、団体生活に潤いを与えるために欠くことの出来ないものです。寮生活の日常は年令の違う者同志が一定の期間同室で生活し、先輩後輩という「縦」の友情を育て合い、その絆を確かなものにして行く場です。

先輩が後輩を慈しみ、全て範となるような感化を与え、後輩は先輩を尊敬するということを寮生の美風とするものです。

このような「縦」と「横」との友情の繋りの中で、お互いに助け合い協力しあうという、社会を構成するための基本となる原理を、寮生活という集団の場で学びとることで、健全な社会人となるための資質を高めようとするものです。

『自己反省』

慈愛をもち、寛大な心の人となって、相手を責める前に先ず自らを省みる心のゆとりを持つことは、人格向上のための価値ある心の持ち方です。

寮生活の規律はこの自己反省によって守られ、自治自律の美風はここに醸成されるものです。

『知的鍛錬』

以上のような四つの徳目を人格形成の基礎として品性の器を作り、その上に知識教育を築くことを真の英才教育と考えます。

品性教育と知識教育は本来切り離されてあるべきものではなく、その両者が相俟ったところに英才教育の成果が得られるものです。このための具体的方法として、寮日課の中にきめられた学習時間での、集団学習・個別学習の長所を取り入れ、勉学を「行」として「自学」の学習習慣をつけようとするものです。

× × × × × ×

寮で学習習慣を身につけた生徒が静かにゆったりとした気持ちになった時に、「利他」「報恩」「友愛」「自己反省」というような少し現代の生徒には耳慣れない徳目をも、教師が易しくかみ砕いて、年齢に応じて毎日の夕礼の場で短い時間話して聞かすということは、寮教育の中でき得る作業であろうかと思います。

(五) もう一つの学校

寮教育を実践するに当たって体験から学んだ具体的な作業について、思いつくままに素描してきましたが、このような方向で教育を進めれば、これからの時代にも寮は昼間の学校と違った「もう一つの学校」としての機能を持ち、その価値を充分発揮できるのではないかと考えています。

私はこれまで三十余年に亘る知育を標榜する高知学芸中・高等学校での寮教育を経て、現在は、八百名に近い全寮制（一部通学生を含む）の明徳義塾中・高等学校で、若い教員と共に新しい寮教育を思考する時を持っております。

教育とは希望を語ることである―と念じ「徳育」と「知育」との接点から更に進んで「体育」とも融合する教育実践を模索する日々です。

（外国語学部イギリス語学科　昭和三十八年卒業生）

麗陵祭を運営して学んだこと

前麗陵祭実行委員会委員長　川瀬達也
（国際経済学部国際経済学科四年生）

私が麗陵祭実行委員会を運営するうえで得たものは何なのであろうか。知識や礼儀、もちろんそれもあるがそんなことではない。何とも言い表しにくいがその根本は人間関係である。頭を悩ます毎日であったが、これは麗陵祭を成功させるうえでとても大切なことであり、後に自分自身を大きく成長させることであった。

麗陵祭実行委員会は有志によって形成されており、人それぞれ目的がばらばらである。ただサークル感覚で楽しさを求める人もいれば、本当に自分たちの力で大きなイベントを成功させたくて入ってくる者もいる。実行委員会は約一五〇人のメンバーで運営されるため麗陵祭の主旨・目的をメンバー全員に反映するのは大変なことであった。麗陵祭が終わった現在でも反映できたとは言い切れないが、麗陵祭の当日みんなの気持ちが徐々に一つになっていくのを肌で感じることができた。この他にも、授業では学ぶことのない貴重な体験は、リーダーシップをとる者の責任ある言動・下級生に与える影響の大きさ・組織づくりの大変さなど、大きく自分たちを成長させたと思う。

最も気を病んだことは、大学側の麗陵祭における主旨・目的と学生側のそれを重ね合わすことであって、これを成功させることにより学風を取り入れた麗陵祭が実現するのではないかということであった。これには大きな壁があり思うように実行委員の団結は深まらなかった。私は実行委員長を任され、麗陵祭を運営するに当たり、学生部の方々からお話を聞き麗澤大学の学風にふさわしい麗陵祭を目指した。しかし、こう言った大学側からの要望を実行委員会のメンバーに要求

してもすんなり了解してもらうことは困難であった。なぜなら、私が思っているよりも自分たちで様々な企画を作り上げようとする学生（実行委員）の意欲は高く、ぶつかり会うことが多かった。学生は学生なりに、いかにして麗陵祭に興味のない学生の参加を促せるかを真剣に考え、どのようなイベントを好むかを考えていたのである。しかしこれは学生だけを中心とした視野の狭いものであった。

私は、大学側の麗澤大学にふさわしいと考えるイベントを実行委員のみんなにただ押し付けることはできず、板挟みにあったような心境であった。確かに大きな視野での成功を考えれば理想の麗陵祭は大学側に近いものになるが、学生の発表の場であることを考えれば、もっと自由な展示・イベントの開催を認めていただければとも思った。また、実行委員が時間をかけて新しいイベントを考え一生懸命に企画書を書いたことを考えると、「それは学風にふさわしくないから実施できない」とは、なかなか言えないものであった。そこで副委員長である若林と中村の力を借りて、実行委員会の意識を変えて視野を広めていこうという結論にたどり着いた。まずは、各局の局長・副局長などに大学祭実行委員会の位置付けを明確にした。実行委員会は学友会組織の中の一組織であり、学友会の予算を使って運営して行くのであるから自分たち実行委員会だけの自己満足ではなく、大学全体で満足いくものを作り上げなければならないと説明した。そこから様々な話し合いが行われるようになった。時には「川瀬さんは学生部や学友会の下で操られているんじゃないのか」などという意見も出るような有り様であった。こういったドロドロとした会議はとても辛いものであったが、本音をぶつけあい話し合いをすることはとても大切であると感じた。話し合いをもたなければ互いの意見を交換し理解しあうことはできず、きっと成功への道はより困難であったであろう。この甲斐あって、徐々に実行委員会の役員は今までよりも大きな視野に立ち、様々な企画や準備を進めてくれた。

また、少しでも実行委員の意識を高めれればと思い、昼休みの時間に実行委員を集め校庭のごみ拾いをやったりもした。このごみ拾いについても主旨を伝えて行ったが、しょうがないからやるといった者が三割ほど。しかし、実行委員の三年生を中心に一生懸命に拾ってくれたのが七割ほどであった。中には、「ごみ拾いをやるようになってから煙草のポイ捨てなんて出来ませんね」と言ってくれる後輩が出始めた。こうして実行委員の団結が強まり、麗陵祭の主旨が徐々に学風に近づいていくように感じた。

大きな組織を運営するに当たって、リーダーシップをとる

者の意識がしっかりしていればその組織はうまく運営できると思う。実行委員会でたとえれば、役員（約三〇人）の意識がある目的に向かって一つになり団結すれば、後輩たちも徐々に同じ方向に向かい始め全体が団結に向かうということである。これには忘れてはならないことがある。各局の役員が自分たちの局の目標（何のためにあるのか）達成のためにどうすればいいかを局員に伝えて気持ちを一つにするという努力が必要である。また役割分担（一人一役）を行い、責任感を育て、能力を発揮できる場所を作る必要がある。また、局長をはじめ各局の役員は、局員のことを責任をもって考え面倒を見る。つまり、局員の顔を見て声をかけ、自分の時間を犠牲にしてでも話を聞いてあげる。私は、こういったことが局を一つにし、実行委員会を一つにし、麗陵祭を成功に導くのではないかと考える。

麗陵祭を成功に導くには、厳しく言わなければならないことが多々出てくる。言いたくもないことも自分自身の立場を考えれば言わなければならない。そんなときも自分の役割を自覚し、孤独を「ぐっ」とこらえる。

苦労話は尽きることなくあるように思うが、それ以上に麗陵祭が成功に終わり辛いことはどこへやら消え去り、今では実行委員長をやって本当によかったという気持ちが一杯である。私は、実行委員長という大役を任せられるに当たって、生き方を変えるチャンスであると考えた。自分自身を向上させるチャンスであると思った。

麗陵祭実行委員会を運営するうえで、多くの温かい周りの人（学園・大学関係者）の援助や、様々な業者の方との打ち合わせ、思っていたよりも多くの来場者、成功した喜び、やり甲斐など、様々な貴重な経験をし、多くの親友もでき、とても充実した一年になりうれしく思う。多くの関係者のかたがた、そして共に麗陵祭を作り上げた実行委員のみんな、多くの参加者に感謝したい。

「麗澤大学との出会い」

国際経済学部・国際経済学科第一期卒業生　玉井千恵子

私と麗澤大学との出会いは、一冊の受験雑誌から始まりました。志望校の選択に頭を悩ませているとき、パラパラとページをめくっていると、ふと目についたのが麗澤大学という名前だったのです。私の家は、モラロジー関係者でもありませんでしたし、関西出身なので、大学名も知らなかったのですが、読み進んでいくうちに、私が探し求めていた大学はここだという気持ちがふつふつと込み上げてきました。

そこには、小人数制のカリキュラムを重視し教師と学生との交流が盛んであること、留学制度が充実していることなど、様々な魅力的特色が書かれていましたが、私が一番心に残ったのは、学生一人ひとりが、一生懸命に学問に取り組む姿勢が、この大学にはあるということでした。

大学という場は、ややもすると遊びの場であるという認識を持っていた私にとっては、麗澤大学は、一条の光のように感じました。

そして、国際経済学部の入試の日がやってきました。私は初めて訪れる麗澤大学への期待と、入試に対する不安とを抱え、何ともいえない気持ちでした。入試の日は、ちょうど大雪の後で、大学のあちこちに残雪がありとても冷え込んでいました。私と母は、広い大学と緑の多さに驚きながら、受験会場を捜しましたがわかりませんでした。そこで総合本館で受け付けの女性に尋ねました。するとその方は、丁寧に会場を教えて下さり、受験生だとわかると、せっかくだから博士のお墓へ墓参していらっしゃいと、にこにこしながらおっしゃいました。私達は、博士？とわけがわからぬまま、道徳科学という学問を創始された廣池千九郎博士のお墓に行って見

ることにしました。さらに、お茶までご馳走になりそこを後にしました。そのときは、時間がなかったので試験終了後、私達は、無事に受験できましたというお礼の気持ちも込めて、初めて博士の墓参へ行きました。お墓までの道のりを進みながら、広い芝生やたくさんの木々、また鳥のさえずりを聞き、兎まで見かけて驚きと感動を覚えました。素晴しい環境だと思ったのです。そして、学祖である博士の墓参を済ませ、大学を見学し、神聖な気持ちと満足感をもってこの場を後にしました。そして、幸いにも、国際経済学部国際経済学科への入学が許され、私は、晴れて麗大生としての学生生活を歩み始めることとなりました。入学直後に行った谷川講堂は、今ではとても良い思い出になっています。

大学の授業が始まると、毎日の講義と課題に追い立てられるような感じで、忙しくてたまりませんでした。しかし、その大変さと同じくらい楽しいこともあり、充実して過ごしていきました。

大学に慣れていくにつれ、私は、この大学が道徳科学すなわちモラロジーという学問を基盤にしていることを知るようになりました。入学前に言葉は聞いていましたが、どういった学問かということは、さほど気に留めませんでしたが、大学生活が始まってモラロジーという言葉を、頻繁に耳にするようになり、「モラロジー」とは何だろうと思うようになりました。私はそれまで、モラロジーという言葉を聞いたことがなかったので、全くわかりませんでした。それどころか宗教の一種だろうというイメージを持っていました。

二年生に進級して、必修科目として「道徳科学B」という授業の中で、廣池千九郎博士が生涯をかけて研究し続けた、学問の一分野であることを知りました。そこで私は、モラロジーとは学問であって宗教ではないのだという認識を持つようになりました。私は、二年生の時から、モラロジー関係者がなさっている寮から大学へ通っており、その関係からモラロジーを勉強している方々から、色々なお話しを聞かせて頂くようになりました。お話しをして下さる方々は、一様に「モラロジーのおかげで、私たちは幸せになれた」とか「モラロジーをしていたおかげで、会社がうまくいき有難い」などと、おっしゃり、更に、報恩をしなさい、先祖の徳を大事にしなさいなどということを言ってくださいました。それは、大学では、モラロジーは学問であると教えられたのに、ここでは、「おかげ」や「有難い」など、モラロジーを宗教のように捉えているのではないかと感じたからでした。このことは、私に矛盾を通り超して、不快感を与え、モラロジーに対して、異常に拒否反応を示すようになりました。このことにより、

私は、精神的ダメージを大きく受け、毎日いらいらしたり、文句を言ったりして、周囲に迷惑をかけてばかりいました。特に、母には一番嫌な思いをさせたと思います。精神的、肉体的に苦しい時期が続きました。

そして、ある休みのときに実家へ帰省した際に、母と芦屋のモラロジー事務所へ一緒に行きました。私の家族は、今までモラロジーを知りませんでしたが、私が麗澤大学に入学が許され、モラロジーと縁ができてから、母が関心を持つようになり、芦屋の事務所とご縁が出来たのでした。

私は、最初は渋々ついていきましたが、芦屋のお世話人の方は、私が今までに会ってきたモラロジアンの方々とは違い、宗教的な話をしたり、モラロジーを押し付けたりすることがなく、私が疑問に思っていることを父親のように聞いて下さいました。私は、思っていることを、すべてはき出し、気分がすっきりしたように感じました。今から思うと、たいへん嫌な思いをさせてしまったことと思います。

しかし、お世話人の方は、じっくりと私の話を聞いたうえで、懇々と私を諭して下さり、私にも反省しなければならない点があることを、気付かせてくれました。このようなことがあってから、私たち家族は、芦屋でお世話になるようになりました。そんな折、大学の女子寮への入寮が決まり、勉強にも集中出来るようになりました。

それからの私は、少しずつですがモラロジーに対する拒否感が消えていき、あまり物事にこだわりすぎずに広い視点に立って判断する姿勢を持つことが必要だと気付かされました。また、知識としての学問だけでなく、よりよく生きていくための処生術としての学問も、見につけてゆかねばならないと思うようになりました。

私は、知識としての学問さえ身につけていればよいと考えており、後者をないがしろにしていましたが、次第に、人間としてどのように生きていくかということを追求する学問の方が、学問としては、より恒久的であり、人類が存在する限り考えていかねばならない問題だと、思うに至りました。特に現代のように価値観が多様化し、人間の基本的価値について新しい視点から議論される時代においては、なおさらです。

人間として、どのように生きていくかを、追求した学問がモラロジーであり、宗教とは異なるのだということを、長い間悩んだ末に、私は、気付くことが出来、体験できたと思うのです。こう考えると、麗澤大学という学びの場は、これら相対するように見える二つの学問を、同時に習得できる、理想的な環境といえると思います。日本の他の大学の多くは、知識中心の学問のみを、扱っています。そのため、大学を卒

業し、社会人になっても、知識しか習得できなかった人は、困難にぶつかったとき対処する術を知らず、苦しんでしまうと思います。私も、精神的にとても弱い人間なので、何かが起こると、すぐにくじけてしまいます。しかし、私は、麗澤大学と出会えたことによって、知識としての学問のほかに、生き方に関する学問もあるのだということを知ることが出来ただけでも幸運だと思います。

麗澤大学とモラロジーに対して、このような新しい見方を持てるようになった私は、それ以降、周囲の勧めもあり、本部講座を受けました。恥ずかしながら、講義の内容は、全然わかりませんでした。しかも、人間関係を築くことが、苦手な私にとっては、知らない人と話したりすることは、大きな辛い試練でしたが、周囲の親切さと気さくさに助けられ、友人もできました。このように、少しずつではありますが私は、生きる術を体得する機会を持てるようになってきたのです。

私にとっての大学生活の四年間は、色々な面において、苦しい時期だったと言えますが、後半になって、私の意識を変えさせてくれるような方々との出会いや、出来事に遭遇することが出来ました。入学前に、私が麗澤大学に求めたものは、勉強に対する、真面目で、積極的な姿勢と、出来るだけたくさんの、知識としての学問を与えてくれることだけでした。

しかし、四年間麗澤大学という環境に身を置くことによって、これらの他に、よりよく生きるための学問の存在と重要性も求めるようになったのです。まさに、「場所の感化」とも呼ぶべき現象だと思います。このことは、私にとって、人生の大きな転換であるといえます。麗澤大学は、今後の私自身の生き方に大きな影響を与えたのです。

また、家族にとっても、私が麗澤大学へ入学したことは、大きな意味を持ちました。先にも少し触れましたが、私が、モラロジーに接したことを機会に母がモラロジーに関心を持ち、芦屋事務所でお世話になるようになりました。また弟も、麗澤瑞浪中学校に、入学することができました。このように、家族にも少しずつ変化が訪れてきたのです。

思い起こせば、一冊の受験雑誌を手にしたことも、麗澤大学のページに目が止まったのも、一種の偶然です。しかし、偶然が重なることによって、それが必然と化し、大きな相乗効果をもたらしているように私には思えます。

私は、この大学を卒業していきますが、今、麗澤大学で学んでいる人、これから入学して来る人の、できるだけ多くが、麗澤大学の真の価値を見い出し、今後の人生の教訓とし、拠り所となるような、学生生活を過ごされることを、願っております。

麗澤大学における課外活動の現況

学生部長・外国語学部教授
千島　英一

学生部長に任命されてから、それまであまり気にもとめていなかったことが、しきりに気にかかるようになってきた。学生の課外活動もそのひとつで、非常勤講師で行っている大学は勿論のこと、学会などで他の大学に行ったときなど、努めてその様子も見学してくることにしている。名古屋の某大学に行った時のことだ。残暑の厳しい中、狭いグランドをうまく共用し、大勢の学生が各種のスポーツに汗を流していた。飽きずに眺めていたら、練習が終わったそのうちのひとつの集団が、かるい会釈をしながらきびきびとした動作で私のわきを走り抜けて行った。振り返って見ると、部屋としてあてがわれていたのはなんといくつものコンテナであった。そのぐるりではもう幾人かが、たっぷりと日焼けした肌を、乾いたタオルで熱心に拭いていた。鍛えられた体に陽光が差し込み眩いばかりの光景であった。うーむ、たとえ施設がままならぬといえども、やる気があればなんでもできるものなんだな、と思わず感心してしまった。

非常勤講師として教えに行っている某大学でのこと。授業が終わり帰ろうと準備していたら、四年生の某君がやってきて、来週の授業を欠席する旨を申し出てきた。理由を問うと、所属している吹奏楽部が全国大会に出場するためとのこと。翌々週、授業に出てきた彼の君に結果を聞くと、欣然（きんぜん）として答えていわく、「お陰様で金賞です。これで来年度の受験生が少なくとも二〇〇人は増えます。学生部の先生方も喜んでいます」と。はたして麗大の学生諸君の中に、受験生の増加のことまで気にかけてクラブ活動に励んでいる学生がどれほどいるだろうかと、これにも驚かされたことであった。

毎年、正月の二日、三日はテレビの前に釘付けとなっている。箱根駅伝があるからだ。熱心に見ていると頭がぼーっとなり、いつしか夢か現かわからなくなり、テレビには麗澤のゼッケンを胸にした選手がどこよりも速く走っている。あれれ、またお屠蘇の飲みすぎか。残念、麗大には陸上部が無かったのだ。箱根といえば、昨年二月、谷川でのリーダーセミナー（注：リーダーセミナーとは、麗大の学友会役員及び各クラブの部長等のリーダーを集め、セミナーハウスでの合宿を通じて、リーダーとしての責任の自覚と相互の親睦のため、学生部主催で毎年行っているもの）で講演していただいた、中央学院大学陸上部監督の川崎先生の箱根駅伝出場秘話を思い出した。選手の頑張りもさることながら、出場各大学の校名を揚げるための凄まじいばかりの努力にはすっかり圧倒された。大学にも企業努力が大いに必要であることが、参加した学生諸君にもよくわかったことであろう。

さて、学生の本分はもとより勉学であるわけだが、教室ではなかなか学べない、人間的なふれあい、思いやり、協力、責任、リーダーシップ、メンバーズシップといったことを学ぶに、部活の果たす役割は依然として大きい。また、受験で疲れた青年期の肉体や精神を癒し、鍛えるにはもってこいの場でもある。全学、二、七〇〇名の麗澤大学では現在、運動部系が一二、文化部系が四（本年四月からは新たに馬術部に、フィルハーモニーが加わる予定）の全部で一六の部が活動している。全部活参加人数は四七三名（内、女性は二六六名）で、その加入率は一七・七％である。四七三名中、運動部に属している者は三三一名（内、女性は一四七名）で、文化部は一四二名（内、女性が一一九名を占めている）。数字から見れば、クラブそのものの数も少ないが、参加している学生の数があまりにも少く、特に、運動系はなかなか選手の確保もままならないのが現実だ。ということで、残念ながら、オリンピックイヤーではあるが麗澤にはアトランタの星は見当たらない。入学してくる学生が高校時代に部活をやっていないわけでもない。内申書を見ると、高校のときは結構多くの学生がそれなりに部活をやっているのだ。しかし、大学ではせっかく入ったのだから、もう苦しいのは結構、四年間楽しく遊ばせてもらいます、といった傾向が強い。一方、同好会は小さな大学ながら、表向き運動系が一五、文化系が二〇もの団体が活動している。表向きと書いたのは同好会はその性質上、消長があり、参加人数等の把握がなかなか困難だからである。

こうした麗大生を外からはどう見ているのであろうか。一番端的に表われるのが就職の時だ。企業の人事担当者にから

よくいわれるのが、麗大の学生はおとなしすぎる、覇気がない、といったことだ。さらには、意外といった口ぶりで「案外マナーや礼儀がなってないですね」といったものが多い。これらのこと、学内にあってもいちいちうなずけることばかりだ。一例を挙げよう。キャンパスで教師とすれちがっても、進路をあけるでもなく、また、会釈するでもなくむしろそっぽを向く学生のなんと多くなったことか（女子学生でも例外ではない）。先日の寒い朝、マーケット前のバス停で待っていた時のこと。白い息をはずませながらやってきた中学生がいた。制服を着ていたからやっと中学生とわかるくらいの小柄な可愛い男の子だったが、「おはようございます」と元気に言って通りすぎて行った。その日、一日なんと気分の良かったことか。ついでに、今どき見知らぬ人にもきちんと挨拶できる中学生を育てているご両親はいったいどんなお人であろうか、躾はどんな風にしているのか、とついあれこれ想像してしまった。そう、マナーや礼儀といったものはクラブ活動をしたからといって、すべてがうまい具合に解決するものではないが、少なくとも指導者から、仲間からあれこれ指摘されることによって、あるいは切磋琢磨することによって、自分というものより深く見つめるよいきっかけを掴むことはできよう。何もしていなかったらそれすらできないし、気がつかないのだから。

これも先日テレビで見た話し。ある土曜日の朝、一服しようとテレビをつけたら丁度、全国チアリーダー選手権大会のドキュメントをやっていた。日体、東海、上智といったチアリーダーの名門校の覇権にかけるドキュメントに混じって、初めて全国大会に出場できることとなった明海大学のチアガールたちの姿も写し出されていた。明海のキャプテンは入学と同時に自らそのチアガール部を創設したそうだ。そして三年間、大会を目指して、練習に、部員獲得に、毎日、埼玉県上尾の自宅から千葉の浦安キャンパスまで片道二時間半をかけて通学し、練習場も部室も無かったところから、やっとこの日を迎えることができたと語っていた。そして、テレビは演技終了後の彼女と部員たちの感動の涙を暖かく伝えていた。ああ、いい青春しているなと、見ていた私も思わず涙。充実した生を活きている人間ほど、清々しいものはない、と思っている。

従来、よく本学では施設がない、授業が忙しい、良き指導者がいない云々と、いろいろ言われてきたが、果たしてそうであろうか。多くのことを見聞するにつれ、それは単なる言い訳に過ぎないことがわかってきた。要はやる気であり、それを持続していく根気であるのだ。お金や施設、指導者など、

むしろ乏しい方がよい。なぜなら、練習場所ひとつをとっても創意工夫が必要となるからだ。時間など無いほうがよい。なぜならそこに集中力が生まれてくる要素があるからだ。大学は無名の方がよい。なぜなら、われわれの力で有名にするやりがいがあるからだ。とはいえ、大学側としても何もせず、ただ手をこまねいているわけではない。施設も逐次充実してきている。学生諸君の負担をできるだけ軽減するべく、公式試合には旅費を全額補助し、演劇などの対外公演にもできるかぎりの援助をしていることは付け加えておく。

　些か、散漫で冗長になったが、最後に、学生部長としての私の夢を述べたい。それはいつの日か、本学学生の中からオリンピック選手を出すことである。

麗澤大学英語劇グループの歴史

外国語学部専任講師
マーウィン・トリキアン

麗澤大学英語劇グループには六〇年以上の長い歴史があります。それは道徳科学専攻塾（麗澤大学の前身）において、一九三五年六月二十日に開かれた第一回英語会にその起源があります。それから長い年月を経て、九〇人ものメンバーによる、よく統率されたグループへと徐々に成長し、毎年シェークスピアの戯曲を上演するようになりました。しかしながら、一九三七年に上演された最初の英語劇は、後に麗澤大学教授となった宗武志により、日本の戯曲を題材にして書かれ指導された、二〇分程度の短い劇でした。その後一〇年間、宗教授はさまざまな英語劇制作に取り組みましたが、時代の困難な状況下で、定期的に活動することは難しかったようです。

一九四六年（一九四七年）に大塚善治郎教授の指導による、第一回のシェークスピア劇の公演が行われました。それは、『ジュリアス・シーザー』のフォーラムのシーンでした。明らかにそれは、困難への挑戦でした。たとえば、陰謀者たちのトーガを作るための布が不足していたので、寮のカーテンをつかって作ったという逸話も残っています。しかしながらこの公演は、たとえ初期の時代には、公演のできなかった年もあったにしろ、現在まで続く毎年のシェークスピア戯曲の一作品を上演するという伝統のスタートでした。その時代には、シェークスピアの戯曲の一作品を通して上演するのはとても困難だったため、いくつかのシーンのみ選びだして上演しました。一九七二年に初めて、ギャビン・バントック教授の指導により、シェークスピアの戯曲を通して上演することを試みました。そのときには、一時間ほどに短縮された『マ

クベス』を上演しました。それからは毎年、われわれは二時間から三時間ほどのシェークスピアの戯曲を上演し続けています。

ギャビン・バントック教授は、イギリスのバーミンガム演劇学校で専門的な演劇について学び、一九六九年から一九九五年まで英語劇グループを指導しました。彼はグループのレベルを現在の水準まで高めるため、多大な努力を惜しみませんでした。現在では、麗澤大学からは退き、演出家という仕事も甥である私、マーウィン・トリキアンに譲りましたが、グループの助言者として貴重な助言をしてくれています。

初期の時代から、劇制作の場においては指導者と学生との間にはたいへん強い協力関係が築かれており、英語を母国語とする方からの助言や協力をいただいています。このことによって、英語の水準を現在のところまで高めることができ、伝統を積み上げ、発展させることができました。一九八二年には、グループのモットーを「さらなる向上を目指して奮闘せよ（"Strive to do better"）」と決めました。この言葉は、シェークスピアの戯曲『リア王』からの引用であり、メンバーたちにしっかりと受け止められています。メンバーは常に、高い水準を維持し、さらに高めるよう奮闘しています。

英語劇グループは、クラブ活動でも授業でもなく、その中間あたりに位置するものだといえます。メンバーは常に教授たちとともに活動しますが、それはカリキュラムを超えた活動であり、正式な大学教育の一部ではありません。英語学科からの協力や、金銭的な補助はありますが、どの学科どの学部の人でもグループに入ることができます。このことにより、英語学科以外の学生でも活動を通して高い英語力をつけることができます。

毎年、活動は六〇人から九〇人程度のメンバーによって行われます。十二月には、次の年の十一月に行われる後期公演のシェークスピアの戯曲の題材が決められ、翻訳の作業が始まります。すなわち、英語を母国語とする人達でさえも、シェークスピアの英語は理解することが難しいため、それを現代化、簡略化する必要があるのです。それと同時に、シェークスピアの本来の英語の美しさや意味を維持するために、大変な努力がなされます。

後期公演のためのオーディションが一月の始めに行われます。シェークスピアの時代には、日本と同じように、女性が舞台にたつことは許されませんでした。よって、シェークスピアの戯曲の中には女性の役はほとんどなく、あったとしてもそれは男性によって演じられました。だから、私たちの劇では、女性のメンバーでも大きな役が演じられるよう、いく

つかの男性のための役は女性のための役に書き替えられます。

二月と三月の間には、劇の根本的なテーマは何か、また、それを舞台上でどのように表現していくかと言うことを決めるため、「イメージミーティング」が行われます。劇は、英語で行われ、観客はほとんどの人が日本人なので、衣装や大道具、小道具などの「視覚的な部分」は、はっきりと劇のテーマを反映させなければなりません。また、台本には「日本語パート」が付け加えられます。これは、劇の内容を要約するだけでなく、その劇のテーマと深くかかわっています。劇の「イメージ」が決定されると、衣装や大道具のメンバーは、デザインを考え始めます。

三月の終りには、卒業を控えた四年生が最後の公演をします。四月には、英語劇の活動に興味を持つ新入生のために、前年の後期公演からいくつかのシーンを抜粋した「デモンストレーション」が行われます。五月には、新メンバーのために、舞台上での動きや英語の発音を練習します。すべての活動はイギリス人の指導者により英語で行われ、メンバーは活動を通して、間接的に英語を学んでいきます。メンバーはまた、英語を話しながら演技をすることにより、英語の文章の正しい強勢の位置を学びます。私達の英語劇では上級生が下級生に演技などの練習を教えるという強い伝統があります。ほとんどの学生が四年間英語劇の活動を続けるので、身につけた全ての知識や経験は次の世代の学生へと受け継がれます。これによって、このグループの水準と伝統が確実に継承されていきます。

前期公演の練習は、六月に始まります。この公演では、普通、シェークスピア劇でないものが上演されます。公演は七月に行われるので、グループの練習はほぼすべての放課後、週末、しばしば早朝の授業の前の時間をも使って進められていきます。この公演では主に一年生に大きな役が与えられます。この経験を通して彼らは英語劇の役者としての自信を付けることができるのです。後期公演において大きな役を演じないメンバーは、前期公演で大きめの役を与えられます。このため一年間を通して見れば、すべてのメンバーがある程度の役を演じることになります。七月の終わりには後期公演の役の最終決定があり、メンバー達は夏休みの間に自分の台詞の暗記にとりかかります。また、夏休みの最初と最後には後期公演に使うセットと衣装の集中制作があります。

二学期が始まるとすぐに、後期公演の準備が開始されます。またもやほぼ毎日、毎週末、毎朝の厳しい練習が十月中旬の東京公演まで続きます。シェークスピア劇の全面的な演出を実現するために何人かの学生が〝シーンマネージャー〟と

なり、演出家が他のシーンを指導しているあいだ、受け持ったシーンを向上させる責任を負います。練習場所が限られているので、彼らはしばしば屋外で練習することになります。そこでの練習は、寒さと戦いながらも発声練習に大変役立ちます。演出には全て英語が使われますが、メンバーの内の一人か二人がアシスタントダイレクターとなり、劇の演出を助けるかたわら必要な時には演出家の指示を日本語に訳します。

はじめに、役者は舞台上の基本的な位置や動きを教わります。これを〝ブロッキング〟といいます。この後に、こまかい〝ワークスルー〟が行われ、メンバーの台詞の理解やそれをどうやってステージで表現するかを確認していきます。これはしばしば、特にシェークスピア劇をやる時には、生徒にとって大きな課題となります。シェークスピアのほとんどのテーマは野望、妬嫉、愛、許し、老い、死など人間の状態や感情の広い範囲におよんでいるので、登場人物達には大きな深みとリアルさがあるのです。これは、メンバーはその人物が英語で何を言っているかだけでなく、その感覚や感情を英語でどうやって表現するかまで学ばなければならないことを意味します。これによって彼らは英会話の授業では到底学ぶことのできない、英語で自分を表現する方法を身に付けることができます。

ワークスルーをひととおり終えると、次はランスルーと呼ばれる通し稽古に入ります。ランスルーを一回行う毎に、演出家は役者にコメントし（もちろん英語で）必要があれば演出補佐が日本語に訳してそれを伝えたり、また自らのコメントも述べたりします。公演の一週間ほど前になると、テクニカルプラクティスを行いますが、これは照明や音響、シーンチェンジなど技術的なタイミングを合わせる練習です。公演二、三日前にはドレスリハーサルといって、本番と同じように全てを準備してリハーサルを行います。

例年、後期のプロダクションは二回公演されます。まず十一月上旬にある大学祭期間に麗澤キャンパス内の小劇場で、その後まもなく東京渋谷の東邦生命ホールにおいて行います。また今までに東京外国語大学で二回（一九七五年及び一九七六年）、また岐阜県にある麗澤瑞浪高校で三回（一九七二年、七三年及び七四年）お招きを受け特別公演をさせて頂いているほか、一九九三年三月には愛媛県内子町にある、近年再設された歌舞伎座において、地元の人々や高校生向けにシェークスピアの「マクベス」を上演、その後高知県の須崎で明徳義塾高校の生徒を対象に、同じ劇を上演しました。

我々の劇グループは数々の外国人や著名な人々によって、賞賛されています。俳優の田中邦衛さんは、かつて二度ほど

公演を観にきて下さいました。その他、上智大学の安西徹雄教授や、昭和女子大学の佐々木満子教授、独協大学の長谷部和子教授なども、我々の舞台に足を運んで下さっています。劇グループのメンバーの中には、卒業後プロの劇団にはいる者もいます。卒業生の渡辺光喜は現在「キャッツ」や「レミゼラブル」で有名な東邦劇場で助監督として活躍していますし、昨年には同じく卒業生の北村正が三年間の演劇学校での勉強を経て、ご存じの劇団四季に所属することになりました。

我々の劇グループは組織としても大変効率良く運営されており、メンバー全員が仕事を受け持ってプロダクションに関わっています。それぞれの仕事は毎年の年間スケジュールとともに、はっきり明記されます。大きく分けて、運営、制作、広報、そしてリアソサエティの四つの分野に分かれています。まず運営面からご紹介すると、最も重い責任を担うのが「マネージャー」で、これは通常三年生男子が担当します。劇活動を管理し、リーダーシップをとり、劇グループの雰囲気作りをし、全てのメンバーの精神面、身体面に気を配るというとても大切な仕事です。そして彼を支えるのが「ガールズマネージャー」と二人の「サブマネージャー」です。会計はグループの全ての金銭面に関わる事項を処理しますが、理在の年間予算は二〇〇万円を超えるため、この多額の予算を注意深く分野別に分け、記録しています。ここ九年間、我々の公演の収益金は一部「ジャパンタイムズ」のチャリティーキャンペーンに寄付されてきました。続いて情報案内はメンバーに練習日時やその他諸々の連絡事項を伝える仕事で、エンターテイメントはパーティやコンパといった催し物を取り仕切る役目を受け持ちます。

制作スタッフは演出、演出助手、シーンマネージャー、さらには大道具に小道具、衣装、音響に分かれています。大道具や小道具は、全てメンバーらの手によってデザインされ、作業場で制作されます。公演後も保管され、のちに別のプロダクションで再利用したり、他の団体にお貸ししたりしています。衣装も同じく全て手作りですが、長年の間に蓄積された衣装の数は相当のもので、日本各地の劇グループにしばしば貸し出されています。音響担当者は作曲、演奏に携わり、照明やメイクなども全て学生によってなされています。これらの仕事どれもが、学生ながらプロの水準を目指す熱意によって行われているのです。

広報スタッフは、広報、印刷、美術から成り立っています。広報は、地元の企業や商店の広告をプログラムやチラシ、チケットなど載せる仕事ですが、これはグループにとって貴重

な収入源になり、これのおかげで印刷費のほとんどを賄うことができます。印刷は、美術担当者と共にその年のプロダクションにあったポスターやプログラム、チラシ、チケットなどのデザインを考え、最終的に印刷会社に印刷を依頼するというわけです。また他にも、VTRや写真によって、各プロダクションの記録を残しています。

リア・ソサエティとはOBの組識で、その数は現在一四〇人にも上ります。この組織は一九八二年に設立され、（この年は偶然にも、三度目の「リア王」を公演した年だったのですが）Lovers of English-Drama Activity in Reitaku（麗澤大学の英語劇活動愛好会）の頭文字をとって名付けられました。この組織の主な目的は現役のメンバーと昔の面々（OB）との交流を深め、この劇グループを愛し、支援してくださる全ての人々と連絡がとりあえるようにすることで、年に二度、グループのメンバーらが自分自身の体験や劇活動を通じて思っている事などを綴った公報誌「エアリエル」を発行しています。このようにリア・ソサエティは我々の長年にわたる伝統による結束を強め、その質をさらに高めるための大切な役割を果たしているのです。

この他にもまだ多くの仕事があり、ここではご紹介しきれませんが、それら全てが劇の成功の源になっている事は言うまでもありません。活動のスケジュール組みから、劇制作に至るまで、毎日練習の前に各仕事の中心的なマネージャーや演出スタッフによるコミッティーを行います。あらかじめ議題目録が作成され（英語で）、それに基づく話し合いも英語で行なわれます。コミッティーを行うことで劇活動がスムーズに進められ、そこには中心メンバーの支えによるところが大きいと言えるでしょう。

このように劇づくりと言っても、その活動はステージで観客の皆さんの目には触れられない部分がほとんどです。劇の成功のためには、計画を十分に練り、準備を怠らず、ハードな練習に取組むことが求められます。各自仕事は違いますが我々の目標はひとつであり、ひとりひとりが、観客の皆さんに楽しんで頂こうと全力を尽くして日々奮闘しているのです。公演を終えるとメンバーは達成感にあふれ、大学生活の中に価値ある何かを見出します。厳しい練習と成功の喜びを共にした仲間たちは、生涯の友にもなることでしょう。

我々のグループは高い水準の劇を目指しています。この劇制作における「過程」は教育的視点から見ても大いに価値のあることです。会計にせよ、あるいは大工仕事や裁縫にせよ、これらの経験は学生の将来にとって役立つものでありましょう。ステージの演技練習を通じて、自己表現の仕方を学び、

人前で話す自信をつける事ができます。仲間と切磋琢磨しながら一緒に働くことで、他人といかに上手くやっていくかという社会勉強にもなりますし、大勢の人をまとめ、様々なイベントを取り仕切っていくという良い経験にもなります。さらに、英語で演技し、英語で学び、英語のネイティブスピーカーと共に仕事をすることで、学生は自然に英語の基礎理解力を身に付けるので、将来ビジネスの場や英語教師などになる際に大変役に立つことだと思います。

演劇は自らの創造力を駆使し、自分自身で考えることを学ぶ創造的芸術です。また演劇はひとりではできません。仲間との協力を通じて、一人ひとりが個性を発揮し、協調性を身に付けます。これが我々の英語劇グループの精神の根底にある「ヒューマン・コミュニケーション」であり、さまざまな角度からの教育がゆき届いているといえます。劇作りにおけるあらゆる試練を克服することによって、メンバーは知的に、道徳的に、精神的に、そして教育的に成長することができ、このキャンパスを卒業した後も、立派な社会の一員として活躍してくれることでありましょう。

（英語劇グループ所属の学生訳）

山岳系課外活動の現状と指導上の問題点

― 麗澤大学山の会の活動を通して ―

麗澤大学山の会顧問
外国語学部助教授
長谷川教佐

Ⅰ はじめに

私は一九八〇年から現在まで麗澤大学の運動系の課外活動のひとつである山の会の顧問をしている。前任の顧問が海外に赴任されるのに伴って引き継いだわけであるが、私自身は顧問になる以前は山岳部の経験もなく、本格的に登山をしていたわけではない。しかし就任後から部員の山行に同行したり、単独縦走などを経験することによって、不十分ながらもある程度の経験を積むことができた。

ここではこの一五年間の顧問としての経験をもとに、最近の麗澤大学山の会の活動の現状を報告するとともに、現代の大学における山岳系課外活動の指導のあり方や問題点を考えてみたい。

Ⅱ 山の会活動の特色

大学という環境が発達途上の青年に与える影響力は、正課の学問をはじめ各種のクラブ・サークルの活動や友人との交友など、非常に多岐にわたるが、そのなかでもクラブやサークルに参加することが、学生のパーソナリティ発達上の大きな課題を達成するうえで非常に有効であることは、夙に指摘されているところである。[1] たとえば運動系のクラブやサークル活動に参加することが学生個人に与える影響としては、1.体力の増強、2.リーダーシップや責任感の涵養、3.判断力の育成、4.生涯スポーツへの準備、5.忍耐力の育成、6.深い人間関係（先輩―後輩関係、友人関係）の育成などが考えられる。

しかし山の会のような山岳系課外活動には、一般の運動系

活動には見られないような特色が存在する。第一は、登山という行為が雨、吹雪、なだれ、雷などの気象上の悪条件、落石、滑落、転落、極度の疲労などにより、非常な危険を伴うものであるということである。そのため山の会の活動に参加することは、高度な判断力と技術を必要とすることになる。特にリーダー層においては、その判断如何によってメンバーの生命を左右しかねない状況におかれるため、高度の知識・判断力・技術が要求される。

第二には、通常大学に限らず各種の学校や企業、地域の体育活動においては、さまざまな規模での競技（試合）があり、多くの場合その試合に勝つことを目的として、普段の活動が行われている。しかし山岳系の活動の場合は、未踏の山岳やコースの初登頂を競うことはあっても、基本的には他のチームと競い合いながら登るということは例外を除いてはみられない。[2] ゆえに登山というスポーツにおいては試合というものがなく、当然勝敗を競うということも見られない。戦うのは相手に対してではなく、自分自身に対してである。これは山岳系の活動のいちばん大きな特色であろう。

第三に登山というスポーツは、まさに自然の中でおこなわれるものであるが、その自然は単なる運動の場所・手段ではなく、自然を味わうことそれ自体が登山の中の大きな目的の一つである。その結果、山岳系の活動を経験することによって、自然を尊重し保護する精神が培われ、また広く環境問題への関心も高まると考えられる。

上記のような山岳系の課外活動に共通する特色に加えて、さらに麗澤大学山の会としての特色もある。それは冬山登山やロッククライミングはしないということである。また沢登りもしない。それを踏まえて、山の会では伝統的に春夏秋の尾根歩きの縦走を中心にして活動してきた。

ではそもそもこのような特徴をもつ山の会はどのような経緯で設立されたのだろうか。麗澤大学が開学したころは学生数も非常に少なかったため、正式のクラブ活動はまだ開始されていなかった。[3] しかし当時も旧麗澤短大から編入してきた学生を中心として登山の好きな学生たちによって山行が自主的に行なわれていた。[4] それが一九六一（昭和三十六年）になって、学友会の会則の変更が行われ、このときにはじめて部というものが正式に学友会の会則に出現した。[5] それまで有志によって、自主的に活動していた登山のサークルはこのときから麗澤大学山の会として、正式に発足したわけである。

その当時の会則は残っていないが、山の会発足に当たっては、当時の学長や学監の「山は楽しむものであって、危険なロッククライミングは避けなければならない」という考えに

よって、山岳部とワンダーフォーゲルの中間をとり、麗澤大学山の会と名付けたという。[6] 以来、山の会は現在までこの方針を取り、春、夏、秋の縦走を中心とした山行を行い、冬季の雪山登山のかわりに、スキーの合宿を行うという形式で活動してきた。

Ⅲ　近年の山の会の活動状況と特徴

A．部員数

山の会は設立後、着実にその活動実績を積み上げてきた（一九七二年の一年間だけ、同好会に格下げになっている）が、ここではそれらを紹介する紙幅はないので、近年の活動状況に移りたい。まず部員数をみてみると、この一〇年間の山の会の部員の推移は、表1のようになる。一九七〇年代もおおよそ一〇人台で推移してきた部員数は、[7] 一九八五年ころも同じ程度であるが、その後八八年、八九年と非常に減少している。これらの年度は連続して新入生の入部が見られなかった。八九年度末には当時の部長の学生が、山の会の解散の相談に来ていた。その際は九〇年にも新入生が入部しなければ、それもやむを得ないと考えていたが、その年度に二〇人近い新入部員を迎えて復活し、以後は大体二〇人台を保っている。

【表1】山の会の部員数（一九八五―一九九四）[8]

一九八五年	一二名	一九九〇年	一八名
一九八六年	一〇名	一九九一年	二一名
一九八七年	一一名	一九九二年	二五名
一九八八年	五名	一九九三年	三二名
一九八九年	二名	一九九四年	二一名

これを部員の性別で見てみると、一九八三年以降に加入した部員総数五一名のうち男子は二二名（四三・一％）、女子は二九名（五六・九％）[9] である。これでみると男女どちらかに偏るということはないが、やや女子が多いという傾向がみられる。

各年度別に見ると、九一年くらいまでは男女同数だが、それ以後は女子の数が多い。また国際経済学部ができてまだ四年経っていないので三年分のデータしかないが、学部別にみると、九二年以降の入部者一七名のうち、外国語学部が九名国際経済学部が八名でほぼ同数である。[10] これらのデータを見ると、部員数も少なすぎるというレベルではなく、その性別、学部別の分布もそれほど偏らず、好ましいものといえる。

B. 活動内容

つぎに山の会の活動内容をみてみよう。活動の種類としては、1.山行、2.トレーニング、3.研修会参加、4.一般山行、5.OB会開催、6.会報作成、7.スキー合宿にわけられる。ただし、7.のスキー合宿はここ三年ばかり実施されてこなかった。これは麗大にスキー関係の部や同好会ができて、スキーの好きな学生はそちらの方に入部していったことも考えられるが、いずれにしても学生の方から希望がなく中断されている。[11] 一九九四年度の普段のトレーニング以外の山の会の活動を表2に示す。(ここは部員達による個人的な山行(個人またはグループ)を含まず、部としての正式な活動のみを掲げてある)

【表2】山の会活動一覧(部としての正式の活動のみ)

(　)は参加者数[12]

1. 新入生歓迎山行(春山)5・14—15雲取山(一四名)
2. 春山山行5・27—29奥秩父縦走(四名)
3. グループ山行6・24—26(大菩薩峠・小金沢山)(八名)
4. 夏山山行(男子7・30—8・05、女子8・01—8・05)南アルプス縦走(男子甲斐駒→千丈→白峰三山)(一〇名)
5. 一般山行8・18—19富士山(二名)
6. 文部省山岳リーダー夏山研修会8・25—31(一名)
7. 秋山山行9・11—14南八ケ岳縦走(八名)
8. 紅葉山行10・23—24北八ケ岳(一〇名)
9. 大学祭出店11・03—05(出店うどん)
10. 一般山行11—19妙義山
11. OB会11・26
12. 会報作成十二月

この年度はそれまでと比べて比較的活動の多い年度であったが、春山山行の参加者が少ない以外はどの山行にも比較的参加者が多かった。[13]

春山、夏山、秋山の山行はいずれも縦走を行い、特に夏は男女ともに五日から一週間の長期の縦走を行った。春山山行は従来は新入生の歓迎をかねて行っていたが、この年度は歓迎の雲取山とは別に春山山行として奥秩父の縦走を行っている。夏山山行は、男子隊と女子隊と分け、男子隊は甲斐駒から千丈をへて白峰三山へ入り、女子隊は直接白峰三山に入った。そして北岳の山頂で合流した。(従来女子隊には経験を積

んだ男子部員が同行していたが、この年はいなかったため私が同行した。）

秋季には以前から行っている秋山山行（夏季休暇末に実施）とは別に、最近は紅葉を見にいくことを目的とした紅葉山行というのを行っている。これは日帰りか一泊程度のものであるが、この年度は一泊二日で北八ケ岳へ行った。また一般山行は、山の会以外の一般学生を対象にして登山の楽しさを知り自然の素晴らしさを味わってもらうために、以前から開催している山行である。かつては二〇―三〇人の一般学生が参加したこともあったが、最近は参加する学生の数はやや少ない。

普段のトレーニングは、週数日二～三時間程度行っているが、参加するメンバー数はそう多くはない。また技術的にも以前はザイルを使って大学校舎の屋上などからの垂直下降の練習などもしていたが、現在ではほとんど筋力や体力の増強が目的のトレーニングになっていて、登山技術に関するトレーニングはほとんど行なわれていない。

C．近年の活動の特徴

1．ハードな活動からの逃避

ではつぎに近年の山の会の活動に関する傾向を考えてみよう。まず第一にあげられることは、ハードな活動を要求される部は敬遠されるということである。近年の一般的な傾向として、多くの大学において運動量の多い激しいスポーツの部は敬遠される傾向が強い。多くの武道系の部や相撲部、ラグビー部など厳しいと言われてきた部は、部員が集まらず試合ができないどころか、部そのものの成立すら難しくなっているという声をよく聞く。山の会のような山岳系の活動も、重いザックを背負って汗を流しながら長時間歩くというイメージから、若年層から敬遠される傾向が続いてきた。クラブ活動に限らず、現実に最近は山を歩いても、若年層は激減し中高年層が大半を占めている。

その傾向をうけて、山の会もしばらく部員数の減少を見てきたと考えられる。ここ数年部員数が増加したといっても、これは麗澤大学の学生総数が以前の三五〇人前後から現在の二七〇〇名あまりと八倍弱に増加していることによることが多い。以前のような学生数であれば、同比率では三名程度ということになる。また入部しても、つぎにみるように以前とは違った感覚で活動に参加しているようである。

2．「山は道場」から、楽しむ山行へ

第二に「山は道場」という考えから、楽しむ山行への変化

である。その中でもいくつかの局面が見られるが、それらは基本的には楽しむ山行ということで共通している。以前は山の会に加入した学生にとっては、山の会の活動は学生個人の課外活動の中心となり、同時に大半を占めていた。しかし現在では特定の部に深く関わるというよりも、同時にいくつかの部やサークルに参加しながら、それを適宜選択しながらいろいろな活動に参加するというスタイルになってきている。

そしてそのことから、部員の山行に対する考え方も変化してきている。山の会の活動だけに専念するわけでないので、他の部やサークルの活動、さらにはアルバイトなどを優先する傾向も見られるようになってきた。以前の部員であれば、山の会の活動を中心に考え、何はおいても山行に参加する（参加すべき）という考えが中心であったが、現在では、そのように考える学生は少数になってきている。

その結果山行においても、山の会の歌にあるように山を道場と考え、みずからの肉体的・精神的な修養の場と考えることはなくなってきている。もちろん以前でも、ただ修養のために山行に参加したとは考えられず、登頂欲や自然と触れ合うことや友人との深い交流を求めて参加していたが、単なる自らの満足（楽しみ）だけでなく、山を「道場」と考える雰囲気というものも感じられた。

しかし現在においては、そのような考え方は影をひそめ、自然との触れ合いや、仲間との交流などを中心として活動が行われている。（もちろん一部の学生には、登山技術の向上や、精神的修養の要素を求める学生も存在する）

最近みられる特徴の一つとして、学生が山行のプランをたてる際、まず山行の最後にはいる温泉を決めてから、そこから逆にルートを考えていくということが多くなった。最後に山から下りたところで温泉に入れるように、ルートの設定を行うわけである。ゆえに、山行の最後の地点に温泉がない場合、そのような山域は選択されることがないということになる。このことも近年の山の会の活動の現状を象徴的に顕しているといえよう。

このような考え方・志向に対しては、堕落したとか、真剣味がないというような評価も成り立つであろう。しかし以前と同じ方法をとれば入部希望者はさらに減少して、いずれは廃部となる可能性が高いことは先にみたとおりである。今後はこのような現状を出発点として、現代の学生の課外活動を考えていく必要があるだろう。

3. 不連続な活動—留学による中断

麗澤大学では外国語学部だけであった一〇数年前から、在

学中の学生の留学を積極的に推進してきた。四年前に開設された国際経済学部においても同様に、在学中の学生の留学を推進している。

留学はほぼ二年生の後半から三年生が中心になるため、学生の課外活動の継続性の点で大きな問題となる。それは個人にとっての継続性だけでなく、組織としての継続性の点でも問題となる。特に外国語学部においては半数以上の学生が上記期間に留学することが多いため、山の会に限らず大学の課外活動ににおいて実質的なリーダー層の学生がいないという事態を招くわけである。

留学期間は半年から一年であるため、帰国後はまた活動に復帰するわけだが、その間の下級生の指導や山の会運営の引き継ぎの点で、十分だとはいえない状況である。そのため上級生による下級生の指導、とりわけ次のリーダー層の育成が不足している。ゆえに登山技術をはじめ、リーダーシップなどに関して問題がみられることも見受けられる。場合によっては、基礎的な登山の知識や技術が不足している場合もあり、山岳で問題が発生する危険性は、以前より高くなっているといえる。現在のところは山行そのものが、以前よりは容易な山域・コースをとり、一日の歩行時間も、また日程的にも短縮されてきているので、特に大きな問題は発生していないが、つねにその危険と隣り合わせであるという不安はぬぐえない。

4. OBとのかかわり

麗澤大学山の会は、現在の麗澤大学のクラブ（部）の中でも、大学設立当初から存在する数少ない部である。設立当初から存在して、現在も活動している部は山の会のほかには、空手道部、剣道部、ゴルフ部（グリーン・クラブ）、庭球部の四部だけである。[14] このように山の会は大学設立当初から現在までの長い歴史をもっているため、OB層も厚い。

そのためか山の会は非常に現役学生とOBとの関係が深かった。毎年作成する山の会会報は必ずOB全員に送付しているし、従来現役学生が主催していたOB会（OBと現役学生の交流会）やスキー合宿の案内なども全員に送付していた。それによって数は少ないながらもOBが参加して、現役学生との交流を行っていた。

近年はさらにその傾向が強くなったようである。近年の山の会の会報には、部員の山行にあたって新宿などの始発駅にいつもOBが差し入れをもって見送りに来てくれたことがよく記されている。また乏しい部の予算を補うため、OBからテントなど用品が山の会に寄付されたこともあった。それだけに部員がOBを信頼し、何かと相談をしていることも耳に

している。

Ⅳ　大学の課外活動における指導・助言体制について

大学における課外活動の指導・助言ののぞましいありかたはどのようなものであろうか。小・中学校や高校の場合と異なり、大学生はある面で成人と同等の扱いをされている面が存在する。高校までは、クラブなどの課外活動は学校（具体的には顧問教師）が責任をもって指導・監督し、児童・生徒に危険が及ばないようにしなければならない。ゆえに登山事故が発生した場合、高校山岳部の顧問は業務上の責任を問われることが多い。[15]

それに対して大学における課外活動では、学生が自主的に活動の内容を決定し、その運営も自分たちで行っていくので、部や同好会の顧問（多くの大学では部長）の役割もその面では非常に限定されたものとなる。

しかし山の会のような活動は、活動中に深刻な事故が発生する危険性が大きいので、顧問教師としては非常なジレンマに陥ることが多い。それはできるだけ学生の自主的な活動に任せて尋ねられたとき相談にのるという本来の顧問的な役割と、そうした場合の危険性の増大という二律背反である。大学生の課外活動となれば、教師の指示のもとに活動するのが望ましいわけでなく、多少問題があっても自分たちだけの力でやり遂げることが、学生の人格形成の観点からいえば望ましいわけであるが、身体上の重大な危険ということになると、あまりそのようにも割り切れなくなってしまうのである。

前述のように登山という活動は危険が大きく死亡事故の発生も十分考えられるため、顧問としてどの程度まで学生の活動に関与すべきかということが大きな問題となる。文部省によれば、山岳部の部長（通常大学の教員）は現役を退いていることが多いため、きちんとした山行の計画を立て、また実際の山行において危険回避の判断・行動をとるなど山行のすべての権限と責任を持つのは学生のリーダーということになっている。[16]

山の会の場合も、実際の山行における危険回避の役割をとるのは学生のリーダーであるが（顧問が同行する場合も、アドバイスは与えてもリーダーシップをとるわけではない）、山行のプランに対し合宿許可の承認を与えるのは顧問の役割であるので、つねに悩むことが多い。現在では学生が作成した山行の計画に対して機械的に承認を与えるだけでなく、コースを地図で確認し、歩行時間や学生の技術・体力から判断して、問題がある場合は変更を指導し、その上で許可している。（山行に出発した後も、悪天候などの場合によってはさ

らに指導を行うこともある。かつて台風が接近していた時の山行の場合は、現地から三時間ごとに一晩中電話で連絡させて、翌朝五時に出発許可を出したこともある）このような現状では、大学側の善意とは別に、当然その判断に対する責任が発生するのではなかろうか。このような責任をもし回避しようとするなら（前述の文部省の見解でも適切な山行の計画を立てること自体学生リーダーの役割になっているので）、とくに指導を行わず形式的な承認のみにして、すべてを学生に任せておけばよいのだろうが、それでは前述のような山の会の活動状況では、事故の発生する危険性が高まってしまうおそれがある。それを知りながら放置するというのは、また重大な怠慢といえよう。この点に危険性の高い運動部の顧問の役割葛藤が存在する。今後このあたりをきちんと整備しておく必要があろう。

また指導・助言体制としては、課外活動において監督やコーチは重要な働きを持つ。山の会では登山に関してはコーチをおいてこなかったが、冬季の活動であるスキーについては、一九六三年から一九八〇年ころまで、計五人のコーチを委嘱してきた。しかし最後のコーチの転居にともなって自然に関係が薄れ、その後新しいコーチは委嘱されていない。しかし前述のような学生の状況を見るとき、通常から登山の知識・技術を教え、また部員の相談にのれるようなコーチの存在は不可欠であるので、明確な役割と責任を伴った新しいコーチの委嘱が今後の課題である。

さらに広く指導・助言体制を考えれば、外部の山岳講習会などに参加することもそれに含めることができる。その点では文部省の山岳研修会への参加も重要な指導の一環である。この研修会は、文部省が大学山岳部リーダーまたは次期リーダー候補者を対象として、毎年夏と冬に剣岳の文部省登山研修所で開催する一週間程度の研修会である。ここでは登山技術に関する講義や実習とともに、救急処置の方法などもきちんと指導される。この研修会には山の会では以前から夏・冬ともに参加していたが、一〇年くらい前から参加しなくなっていた。

しかし二年ほど前から、またリーダークラスの学生が夏山研修会に参加するようになった。この傾向はぜひ定着して欲しいと願っている。学生部からもその重要性を鑑み、交通費や参加費用を援助してくれるようになったため、学生も非常に参加しやすくなっている。このような研修会は、基本的に学生の自治活動である山の会の活動において、その機能を高める非常によい方法である。山の会は冬山やロッククライミングはしないという前提で活動しているが、春山や秋山は積

雪のあることも多いので、今後は冬山研修会にも参加して非常時に対応する知識・能力をさらに身につけて欲しいと考えている。

最後に指導・助言体制としてのOB会について触れておきたい。従来山の会は前述のようにOBと現役学生の関係が深かったが、その関係は組織的なものでなく独立した組織としてのOB会は存在していなかった。しかし一九九四年末から山の会初代顧問（OB会の会員でもある）や何人かのOBの発案によって山の会OB会の設立の準備が進められ、一九九五年の大学祭の際の設立総会において、山の会OB会会則が承認され、正式に麗澤大学山の会OB会が発足した。

今後はさらに個人的な関係だけでなく、組織としても登山の知識や技術の面で、積極的に現役学生への助言やサポートにあたっていただきたい。今後のOB会の積極的な活動に期待したい。

〈注〉

1) たとえば内多毅「大学教育とクラブ活動」東海大学学生活研究所編『クラブ活動―教育の風化を防ぐために』東海大学出版会一九七八など。

2) 国体などの登山競技などが例外としてあるが、大学生が個人として参加することはあっても、大学の山岳部として参加することはない。

3) 桑原忠行「二〇年誌発行にあたって」課外活動二〇年誌編集委員会編『課外活動二〇年史』麗澤大学学生部　p二〇

4) 初代顧問森川教授による。

5) 同上　p一四〇

6) 相羽宣夫「山の会発足の頃」同上　p九二

7) 同上　pp三六―三七

8) 山の会会報二六号（一九九四）のOB名簿をもとに計算。

9) 同上

10) 同上

11) 今年度から復活する予定。今年度はまずOB会と合同で行う。

12) 山の会会報二六号（一九九四）pp三―四

13) 八月の一般山行は特に留学生に呼びかけての富士登山であったが準備が整わず、この年は部員による下見ということになった。

14) 課外活動二〇年史　pp三〇―三一

15) 文部省『高みへのステップ―登山と技術』東洋館出版社　一九八五　p三八

16) 同上　p二四

麗澤大学剣道部と堀ノ内勇吉先生

麗澤大学剣道部顧問
外国語学部教授　奥野　保明

麗澤大学としての最初の卒業生を昭和三十八年春に送り出して以来、剣道部の卒業生はおよそ一四〇名になりますが、最初の四期十二名を除き、剣道部の学生は全員堀ノ内先生のご指導を受けて巣立って行きました。当時剣道教士七段の堀ノ内勇吉先生（大正八年生まれ、鹿児島県出身）を師範としてお迎えしたのは昭和四十一年（一九六六）であり、爾来三十年間に亘って、先生はまさに実践を通した無償の愛情を麗澤の教育に注いで下さっています。ＯＢ会報などを通じて、道を求めてひたすら精進される先生の姿に触れ、新たに勇気を奮い起こす卒業生も少なくありません。剣道部の精神的基盤となっている堀ノ内先生の教えと実践の一端をご紹介すると共に、剣道部の状況と活動について報告したいと思います。

従来規模の小さい大学であること、留学によって中堅の部員が半年ないし一年間抜けてしまうこと、また時間割りの都合で夕方の時間は活動しにくいことなどのハンディを抱えながら、十名前後の学生が道場に集まって汗を流してきました。一九七〇年には千葉県学生剣道連盟に加盟し、時には個人戦で入賞するなど好成績を残すこともありましたが、多数の部員をかかえる他大学にはかなわず、対外的には比較的ひっそりと活動している状態でした。わずか三～四人の学生しか道場にいない時期もありました。それを考えると一層、堀ノ内先生はよく見放さずにご指導に来てくださったものと、感謝と敬意をいだかずにはいられません。昭和五十八年（一九八三）のＯＢ会報に寄せられた先生の随想をまずご紹介しましょう。

「学園の桜に想う」

桜の開花時は例年になく好天に恵まれ、孫娘（三才）と共に、咲きほこる桜が調和する学園の素晴らしい自然の美しさに感動させられました。古語の「花は桜木、人は武士」にあやかり、剣道を学び始めて五十五年を数えます。その間、暑中稽古、寒稽古等、難行苦行を重ねて参りました。学園に咲きほこる桜の樹齢も、私と同年か少し先輩になるかと思われます。永い風雪に耐えながら成長した老木ながら、枝一杯に花をたたえ、私達の身と心をなごませてくれる老樹の偉大さにただ驚嘆するばかりです。昭和四十六年京都大会の時、かねてから御指導をいただいている先生から、桜の成長過程にも似た心あたたまる次のようなお諭しを受けました。「剣道の修業と言うものは、力に頼り過ぎると、若いうちは其れで良いけれども、体力には自ら限度があって年と共に低下し、それに伴って実力も落ちるものです。技には限界がないので修練を積むほど技が練磨され、益々技が冴えて来るものです。技は年をとることがありません。」

現在もなおこの教えを堅く守って、学生の皆さんと長続きする心技の修練に心血を注ぎ、相互の研鑽に努めています。

青春は無限の可能性をつつむと言われていますが、限られた人生の中で、それぞれ年代に繋がる「一筋の道」を剣道に捉え、部活の皆さんと共に健康で勉強できますことは私の人生に深い喜びを感じます。剣の道を通じて得た「心気　力」のエネルギーを学業にぶつけて戴きたく、桜の大樹に勇気づけられ想うのであります。

道と言う言葉に迷う事なかれ
朝夕己がなす業と知れ

堀ノ内勇吉

千葉県の沼南町にお住まいの先生が、毎朝四時半に起床し、東京の野間道場で一汗流してから出勤という生活を続けておられる頃の随想であります。先生はこの頃八段を目指して修業を重ねられ、全日本高年齢者武道大会でも二連覇を果たされています。八段審査の受験者というのは、七段取得後八年以上を経たうえ、各都道府県の厳しい予備審査をくぐり抜けてこられた方々であり、長年に亘って積み重ねた稽古の成果を、二分間の対戦二回という僅か四分間に凝縮して審査を受けるのであります。十五名の審査員の内、十二名以上の「可」を受けて初めて合格となります。この試験に臨むのは毎年五百余名の方々で、その内一次、二次の審査に合格して八段を認

められるのは僅か十数名という実に狭き門です。この難関を突破して平成元年八段となられた先生から、卒業生に対して次のようなメッセージが届きました。

昨年の五月八段合格に際し廣池先生を初め学園の先生、ＯＢの皆様、在校生の方に心暖まる御祝辞ならびに御祝記念品を戴き、身に余る光栄と感謝で一杯であります。当時の感激を偲びあらためて厚く御礼を申し上げます。

心技体最高の八段は険しい剣が峰でした。頂上に手がとどきながら力足りず落ちることばかり、七転び八起きをしみじみと体得しました。京都大会のあるとき禅で有名な南禅寺に御参りしました。目の前の「飛び過ぎて虫失う蛙かな」という句が私の心を強く打ちました。いままでの修練に反省し、欲を捨て無心になることに勉めました。苦節十年ようやく剣が峰に到達することができました。私の剣道人生の幸せは下記によって与えられました。

①本気ですれば大抵のことができる

②本気ですれば何でもおもしろくなる

③本気でしているとだれかが助けてくれる

ということを皆さんから学びました。有難うございました。奥深い剣の道を求めて、学生やＯＢの皆さん頑張ってください。今後とも御指導のほどお願い致します。

このような堀ノ内先生の求道の精神と実践に養われてきた剣道部に、数年前から若い立派な指導者が加わりました。昭和六十二年から武澤保美五段（広池学園出版部職員）がコーチとして、また平成三年から四年にかけて、順天堂大学剣道部の主将を務めた谷垣光太郎氏（現在麗澤瑞浪高校教諭）が学生部職員、剣道部顧問補佐として学生達の指導に当たり、若者に活を入れてくれました。ＯＢの皆様の芳志によって、堀ノ内先生の筆による新しい部旗と「文武不岐」「文武両道」の文字を入れた二種類の面タオルが作られたのはこの頃です。平成四年からは森克昭六段（学寮課職員）が、監督として献身的に学生の指導全般を面倒見てくれています。平成七年度の部員数は、男子八名女子七名の計十五名で、月水金は午後六時半から八時、火木土は朝の一時間を活用して稽古と体力作りに励んでいます。

国際経済学部の設置に伴う新風と森氏のリーダーシップ発揮によって、部員数の不足や勉学と部活の両立の難しさの問題等を抱えながらも、この数年で剣道部の活動も大変活発になってきました。第一には、他大学との交流が盛んに行わ

れるようになったことが挙げられるでしょう。近隣の二松学舎大学、中央学院大学を初め、千葉大学、埼玉大学、東京理科大学、成蹊大学などとの練習試合や合同稽古などを通じて、学生達は内輪の殻を破り、臆することなく外に向かって行動するようになってきたと言えます。また、森氏の発案によって士気を盛り上げる剣道部の歌、幹部交代の儀式などが導入され、部としての形が整えられてきました。火曜日と木曜日の朝稽古の後、タバコの吸いがらや塵紙の目立つようになったキャンパスの清掃を、剣道部員が始めたのも四年前のことになります。エゴイズムと無関心が嘆かれる世相にあって、このイニシャチブは特筆に値することでありましょう。

最後に、剣道部の国際的活動をご紹介します。堀ノ内先生はこれまで何度も日本の代表として、剣道の指導と普及のためにフランス、オーストラリア、カナダ、ベルギー、ドイツ、モロッコなど世界中の国々へ出かけておられますが、森氏も平成五年には日本学生武道協議会からオーストラリア遠征に派遣され、平成七年には高橋康祐、矢野祐和の二名が関東学生剣道連盟海外訪問親善使節団の一員としてヨーロッパに派遣されました。また、一年間イギリスに留学した岡本誠は、全英剣道選手権大会で優勝すると同時に、ロンドン大学剣道部の一員として団体戦で活躍し、ロンドン大学からの感謝状も携えて先日帰国しました。台湾の淡江大学に留学する学生は、あちらでも剣道部の活動に参加して交流を深めておりますし、ドイツのイエナ大学では、平成四年秋から一年間留学した松本栄男と私の働き掛けで剣道部ができ、日本での合宿と指導を夢見ながら十数名の学生が練習を続けております。留学した人はだれしも痛感する通り、海外との交流がますます盛んになる今日、日本人として日本の伝統的文化を学び、身に付けることほど重要なことはないかと思います。海外に羽ばたく青年の育成を掲げる本学においても、剣道等の日本文化を基盤にした国際交流に対する支援を期待したいものです。

二年半前に完成した武道館の剣道場正面脇には、堀ノ内先生のご寄贈による自筆の「文武高徳」という額が掲げられ、喜寿を迎えられなお孜孜として研鑽に励まれる師範と筑波大学大学院にて研究を続ける森監督を中心に、「文武両道」「文武高徳」の目標を胸に秘め、次の剣道大会に向けて稽古を重ねる学生を見ながら、まさに「師弟同行」ここにあり、の感を深くするのであります。

剣道部歌

池田　裕　作詞
諸坂　成利　作曲

一、若き血潮がたぎりたち
光ケ丘にそびえたつ
わが麗澤の学舎に
今日も磨くはこの腕(かいな)
われらは誇る剣道部
真剣尚武ここにあり

二、思いは同じ書(ふみ)を読み
強き身体を鍛えあげ
わが麗澤に学ぶもの
文武の道に外ならず
われらは誇る剣道部
真剣尚武ここにあり

三、東の野には筑波山
仰ぐは遠く富士の嶺
わが麗澤に集うもの
心も身もたくましく
われらは誇る剣道部
真剣尚武ここにあり

野球と勉強の狭間に

麗澤大学野球部顧問
国際経済学部教授　谷口洋志

野球部の練習をみて、いろんなことを考えさせられた。

春の木曜四時半すぎ。大学での授業を終えたあとグラウンドに出かけると、野球部員が四、五人いる。彼らは、グラウンドの整備や軽い準備運動をやったあと、キャッチボールやトス・バッティングをはじめた。そのあと彼らは守備練習を行うべく、私にノックを求めてきた。高校野球をやっていた昔を思い出して嬉しくなりながら、手に豆ができてつぶれかかる頃、ノックを終えた。ノックのあと、彼らは素振りをしたり、ベース・ランニングを行ったりした。

一通り終えると、午後六時も過ぎている。中には一汗かいたものもいる。そうこうするうちに、部員が少しずつ増えてくる。六時半からスタートする練習に参加するためである。私がやったノックは、正規の練習前の自主練習のひとこまでしかなかったのである。

午後六時半から九時近くまで正規の練習が行われる。彼らはいつ夕食をとるのだろうと思いながら、最後まで付き合う。真っ暗な空の下でライトを付けながらの練習。金属バットでボールを打つたびに、キーン、コーンという金属音がとどろき、近隣に迷惑がかかっていないかなどと心配したりする。

午後四時半から参加している部員は、実質的に二度練習を行い、総時間も四、五時間に及んでいる。決して短くはない時間である。しかもナイター試合ができるような明るさでなく、局所的に照らし出された場所に集まっての練習である。

大学の授業は午後六時まで行われる。授業が早く終わった者は、午後四時半頃の自主練習から参加し、午後六時まで授業がある場合は六時半からの正規の練習に参加する。六時前

スタートは、部員の何人かが揃わないため、できないという。

野球部員のほとんどが所属する国際経済学部は、情報教育、英語教育、専門教育に熱心であり、学生には宿題や課題が課されることも多い。これらを実行するだけでも、かなりの時間が必要である。これに野球の練習時間が加わるのだから、恐らくは野球部員のだれもが一日二四時間でなく、三十時間くらいほしいと思っているに違いない。

もちろん、こうした問題は野球部に限らず、他の部・サークル活動にも当てはまる。勉強だけでも大変なのに、部活動やサークル活動の大変さがさらに追加されるのである。特にスポーツの場合には、心身共に疲れる上に、翌日にまで疲れが残ることもある。勉強しようとしてもどうしても睡魔に負けてしまう。

こうしたとき、「勉強をとるか部活動（野球）をとるか」という選択に迫られることは避けられない。ましてや、麗澤大学の特色ともなっている外国留学を希望する部員であれば、「野球をやっている暇はない」という心境になっても不思議でない。だから、野球部に入部しても、野球以外の何かに重要性を見いだして結局退部していく者が少なくない。残念ではあるが、退部する本人にとってはそれがベターな選択なのであろう。

ところで、「勉強か野球か」という選択のほかに「勉強も野球も」という選択があっても良いように思う。実際、私が野球部員に期待することは、「勉強を捨てて野球を選んだ人間」ではなく、「勉強も野球も目指す人間」になってほしいということである。そのためには、練習方法に大きな改善や工夫が求められる。

野球部の練習を見ていて思ったのは、無駄な時間が多いということであった。暗がりでぼんやりと人の動きを見ていたり、授業や芸能その他に関する雑談を交わしたりする暇があれば、次の練習に取りかかったり、別の練習を行ったりする方がよい。何も全員が同じことを順番に行う必要はないのである。もっと無駄を省いた練習方法を皆で見つけていけば、時間は半分になっても、「内容の濃い充実した練習」になることは間違いない。

その後も何回か練習に参加した。そのとき、全員が練習に参加することは希で、多くの部員は、断続的にしか参加していないことに気が付いた。ゼミの延長やアルバイト、歯医者等への通院、あるいは単なるさぼりかどうか知らないが、部員がなかなか揃わない。

練習を時折休む者が多いのを見て、これが大学野球の限界かなとも思った。練習を続けることの重要性が理解されてい

ないのを知って、残念な気がした。

毎日何かを続けることの効果を私が知ったのは、高校野球を終えた大学生時代であった。当時私は毎日、本を最低百ページ読むことを自らに課した。三年間続いた。最初は、ただ本のページをめくるだけであったが、いつの間にか、長い本と出会っても苦にならなくなった。それどころか長編物を読み終えたときの嬉しさや充実感は格別で、そのために意図的に分厚い本を探して読んだこともあった。そのときである。

「はて、こうした読書の習慣は、どこかで経験したような感じがするぞ？」

答えはすぐに見つかった。それは、高校時代の野球の練習であった。一見すると、退屈な練習を毎日続けているだけのように見えながら、毎日が新しい発見と期待の連続であった。しかも、毎日練習を続けることで短期的な効果は期待できないが、長期的な効果は極めて大きい。勉強と野球という、一見すると両立しがたいものが、実は、似たような方法論が必要とされるという意味で、共通性の多いものではないのか。

（野口悠紀雄氏風にいうと、これが「『超』勉強法」あるいは「『超』練習法」？）。

勉強と野球の両立ということに関連して、私は二人の野球部員を思い浮かべる。二人ともチームの主軸で、野球の練習は人一倍熱心である。そのうちの一人は勉強もすごく熱心で、うつろな目で聞いている人間が多い中で、いつもしっかりと目を見開いて聞いていた。教員の側から見て反応の良い学生であり、試験でも申し分のない成績を残した。野球でも勉強でも充実しているという印象であった。

もう一人の学生は、野球は他の誰よりも熱心であるが、勉強は熱心でなかった。このことが気になって、ある授業で、彼を含む出席者に対して私は次のような話をした。

野球が上手な人と下手な人がいたとしよう。上手な人は時間があれば素振りを心がけるなど練習熱心であるが、下手な人は練習中も雑談に耽って練習に身が入っていない。そうすると、どのような結果が生じるだろうか。上手な人はいっそう実力を伸ばすのに対し、下手な人はいつまでも実力が向上しないであろう。上手な人に追いつくどころか、ますます差が付いてしまうはずだ、と。

同じことは大学の授業でも言える。英書講読で専門書を読む。こちらは、たとえ知っている単語であっても調べ、誤りはないかチェックして臨む。ところが出席者の中には、パラグラフの要約を求められながら、指名されてから辞書を引き、ほとんど日本語らしからぬ言葉を並べてお茶を濁す。四年生の場合には、就職活動という大義名分を堂々と振りかざして、

予習する時間がなかったことを弁明する。中には、授業に出ているだけで十分なはずだと思い込んでいる者もいる。結局、皆のための勉強のはずが、一部の人間だけの勉強で終わってしまう。一方は実力をいっそう伸ばし、他方は実力をいっそう低下させる。

ここで、一つのエピソードを思い出す。高校時代、三番バッターで捕手を守る主将がいた。彼は、チャンスにめっぽう強く、私が塁上にいたとき、よく彼の長短打で本塁ベースを踏むことができた。一年生の入学時からのレギュラー選手で、中学時代には投手として県大会で優勝した経験もある。そうした彼と私の力の差は、生まれつきの才能や野球センスだと、当時から最近に至るまでそう思っていた。

ところが、四十路に入って開かれた高校同窓会の席上、彼の友人の一言で、飛び上がらんばかりに驚かされた。彼は、練習を終えて家に帰ってからも時間を見つけては素振りを行い、人の見ていないところで一人練習をやっていたというのである。目から鱗が落ちるとはまさにこのことである。

それに比べ、自分は何をしていたのだろう。練習で疲れて家に帰ってからは、寝そべっているばかりで、練習することなど全然思い浮かばなかった。自分が打てないのは、精神的な動揺か、身体的な調子の悪さのためであって、気分転換さえ行えば調子が出るはずだとずっと思っていた。それは、常日頃は何の努力もしないくせに、ある日突然、英語を読んだり話したりできるはずだと思うようなものである。

こんなふうに考えると、私には、野球の練習も大学での勉強も、同じようなものに思えてくる。一方で学んだ方法論は、他方においても活かすことができる。しかし、学ぶ意思も気持ちも無ければ、意味もなく時が過ぎるだけで、実力は向上しない。この意味で、今の野球部員には、野球でも勉強でも実力を発揮してほしいと願っている。

愛する馬たちと共に

― 麗澤大学馬術部活動報告 ―

麗澤大学馬術部顧問
国際経済学部専任講師　中野千秋

麗澤のキャンパスに馬が来た！

一九九三年九月十四日、中央競馬会新潟競馬場の乗場クラブから運ばれてきた二頭の馬が廣池学園中央広場の芝生に降り立った。「小金」と「麗花」。廣池幹堂学長自らの命名によるものである。小金と麗花は、中央競馬会の獣医をしておられる横田貞夫氏（麗澤瑞浪高校の卒業生・四十一期）の仲介で、中央競馬会馬事普及制度の一環として無償で寄贈していただいた。麗澤館裏にあった倉庫を厩舎に改造、小さな馬場も作って、二頭は新たな人生（馬生？）を麗澤のキャンパスで過ごすことになった。

「なぜ麗澤に馬が？」とお思いの方もおられるであろうが、実を言うと「言い出しっぺ」は廣池学長ご本人なのである。生き物を身近に感じることを通じて情操教育に資することが本来の目的であるが、廣池学長は、以前にお住まいになられたことのあるロンドンやバージニアの風景を麗澤のキャンパスに重ね合わせられたのかもしれない。また光ケ丘の地は、江戸時代には「小金牧」という牧場であったらしく、安藤広重の浮世絵にもなっている（廣池学園会員会館のオリジナル名酒「大勝山」のラベルになっているあの図柄である）が、かつての光ケ丘の風景を蘇らせようというお考えもあったらしい。いずれにしてもアイディア・マンである廣池学長の面目躍如たるところである。

麗澤大学乗馬同好会の発足

馬は来たものの一体だれが世話をするのか。馬を扱った経験のある職員数名をかき集めて当面の世話をすることになっ

た。しかし、何と言っても動物の世話は大変である。馬は繊細な動物で、毎日運動をさせてやらないと病気になるし、体調によってエサの分量、タイミング、配合の仕方にも気を使わなければならない。馬に盆も正月も関係ないし、出張や仕事が多忙の時でも、犬のように「ちょっとエサをやっておいてくれ」と誰にでも頼めるものではない。そんな時に、話を聞きつけた大学生数人が手伝いに廐舎通いに来てくれたのは有難かった。これらの職員・学生が一体となって廣池学園乗馬クラブを発足し、当面の活動を行なっていくことになった。こうしてやっとの思いで最初の冬を越すことができた。

春になると新入生たちも加わり、大学生のメンバーが増え始めた。そこで、職員（およびその家族）をメンバーとする「麗澤乗馬クラブ」と、学生たちの「乗馬同好会」に組織を分割して、馬の世話と乗馬の練習を行なうことになった。そうして一九九六年六月に「麗澤大学乗馬同好会」が大学公認の同好会として発足したわけである。

乗馬同好会の学生たちは全員「馬は初めて」の者ばかりで、当初は何が何だかわからず戸惑う者も多かったようであるが、夏の合宿を終えた頃からすっかり「馬の魅力」に取り憑かれるようになり、授業の合間を見てはいそいそと馬の顔を見に行く始末である。馬の世話をするのも学生主体となり、この頃から当番を決めて学生たちが交替制で面倒を見てくれるようになった。

馬を世話するということ—思いやりの心と責任感

乗馬というと、紳士淑女のスポーツで、華麗な乗馬服に身をつつみ颯爽と馬にまたがる姿をイメージされる方がほとんどであろう。しかし現実は大違いである。一日のうち馬に乗って練習できるのはせいぜい一人二〇分ぐらいのもので、あとはほとんど馬の世話である。強烈な臭いのする廐舎で、ボロ（馬糞のことを業界用語でボロと呼ぶ）と藁にまみれ、小便を水で流し、二〇キロもする飼桶や水桶を運び、自分の手荒れも厭わずに馬の足を洗ってやったり、フケにまみれながらブラシをかけて毛並みを揃えてやる。普通の人なら「何を好んでそんなことを……」と思われるかもしれないが、馬乗りにとってはごく当たり前のことなのである。朝九時に始まる一限目の授業が眠くて間に合わないと敬遠しがちの学生たちが、一日たりとも欠かさずに毎朝六時半からこのきつくて汚い作業を愚痴の一つもこぼさずに黙々とやっているのである。愛する馬たちがそこにいる限り当然のことなのである。

最近、学生たちのモラルが低下しているとか、自分のことしか考えず周りのことに目の届かない「悪しき個人主義の風

潮」が強くなっているというような言葉をよく耳にする。仮にもしそれが事実だとしても、教室でそのような学生を前に「思いやりの心」だとか「責任感をもて」などという言葉を一万回繰り返したところで一体どんな効果があるというのだろうか。馬に愛着を覚えた学生たちは、そんな言葉を一度も発しなくても、馬がびっこをひいていると思えば湿布をしたりマッサージをする。馬が汗をかいていれば、体が冷えないようにそっと毛布をかけてやる。今日はたくさん運動をしてくれたからと、こっそり余計にエサを与えてやる。前の晩どんなに夜遅くまで飲んでいたとしても、当番の者は朝六時半には必ず厩舎に駆けつける。馬乗りとして、そんな当たり前のことを当たり前のようにやっている学生たちを私は誇りに思う。

馬術の奥深さ―謙虚な心と人馬一体の喜び

馬術というのは、生き物を扱う数少ないスポーツの一つである。競技の種目に男女の区別はなく、かなりの年齢まで楽しむこともできる（因みに、井上喜久子女史がソウル・オリンピックに出場したのは六三歳の時であった）。馬を好きになりさえすれば、誰にでも楽しめるスポーツなのである。その反面、馬術ほど難しいスポーツはそれほどないと思われる。馬は一頭一頭その性格も癖も違うばかりか、その日の体調や機嫌によって動き方も違ってくる。馬の気持ちが手に取るように分かるようになるなどというのは至難の技である。馬術の奥深さはまさに無限であると言ってよい。

その無限に奥深い馬術の難しさの前に、我々の技量は絶望に近いほど無力である。馬は乗り手の技量の分だけしか動いてくれない。馬がどのように動いているかを見れば、その乗り手の技量は一目瞭然である。だから、馬を思い通りに動かせないからといって、誰にも文句を言うことはできない。自分の技量の足りなさを謙虚に反省する以外に上達の道はない。そんな中で、きのう出来なかったことが今日できたらこの上ない喜びになる。きのうまでどうしても右に曲がってくれなかった馬が、今日ちゃんと曲がってくれたら、もう舞い上がらんばかりに嬉しいのである。自らの技量のなさを謙虚に自覚する中で、きのう一つ、今日一つ、馬が喜びを与えてくれるのである。

馬乗りの技量の中には、当然、馬の気持ちを理解することも含まれる。馬は極めて繊細な感覚を持つ生き物で、「第七感」を持っているとさえ言う人もある。まさに動物的本能とでも言うべきか、馬に接する人の気持ちを敏感に察してしまうのである。嫌なことがあってイライラした気持ちを引きず

ったまま馬に乗るのでは、馬にとってこれほど迷惑なことはない。そんな気持ちは出来るだけふっ切って、心穏やかに馬に向かわなければならない。馬に接するに驕りの気持ちは禁物である。邪心のない純粋な馬に接するには、やはりこちらも汚れのない清らかな心を持っていなければならない。馬に接するそのこと自体が心の鍛練となる。

そもそも馬と人間、同じ生き物同士が一対一で向き合うのである。全人格をぶっつけて接するのでなければ馬に対して失礼ではないか。人馬一体の境地とまでは行かなくとも、ありったけの気持ちを馬にぶつけることは出来るはずである。馬にバカにされたら思いっきりくやしがればいい。馬がいうことを聞いてくれたら褒めてやろう。馬が悪さをしたら心から叱らなければならない。思い通りの運動ができたら馬と一緒になって喜ぼう。要するに、喜怒哀楽を馬と共にするのである。学生たちには、今まで通り無心で馬に接してくれればそれでいいと思っている。そうして行くうちに、馬乗りとして必要な謙虚さや思いやりも自ずと備わり、やがて人馬一体の喜びを馬から教わることになるのだと思う。

乗馬同好会会員にみる現代学生気質

学生たちの「入れ込みよう」は想像以上のスピードで高まり、一九九五年度に入ると、千葉県馬術協会にも加盟し、県内の競技会にも出場するようになった。まだまだ初心者クラスの競技種目への参加にとどまるが、すでに数名の入賞者も出てきた。馬術の技術面でもまずまず順調に伸びてくれているようである。私自身も学生時代に馬術をしていたのだが、競技会に出場したときには緊張のあまり顔が引き攣っていたのを今でも覚えている。学生たちには、できるだけ緊張をほぐしてやらなければと思っていたのだが、それも杞憂に過ぎなかったようである。競技を終えて帰ってきた学生が口にするのは「ああ楽しかった」「ああ気持ちよかった」という言葉なのである。無心になって思う存分に競技を楽しんでくることができるというのは全くたいしたものだと感心せざるを得ない。あっけらかんとしているというか、天真爛漫とでも言うべきなのか。いずれにしても、余計なことをあれこれ深く考え込むことなく、与えられた機会にやるべきことを精一杯、しかも楽しんでやってくることが出来るというのは素晴らしいことだと思う。そんなところに最近の学生気質の一端を垣間見るような気がする。

馬術を行なっていくためには、日頃から様々な作業が伴うものである。これらの作業では、普通の学生生活では体験できないような仕事がいろいろ待ち受けている。鋸の使い方、

ロープの結び方、草刈り鎌の使い方等々も、学生たちにかかると何でも「遊び」に変わってしまうのである。それは決していい加減にして手を抜くという意味ではなく、たとえ大変な仕事でも、遊び心をもって楽しんでしまうのである。例えば、毎年晩秋に近所の農家に寝藁をもらいに行くのが恒例となっているが、この藁作業は「稲刈り講習会」に早変わりする。馬術用の障害作りのときも、障害をキャンバスに、ペンキを絵筆にして見事な芸術作品ができ上がってしまうのである。何でも遊び心をもって楽しむのだから、愚痴や文句が出ることはほとんどない。さぞかし大変だろうと思うような作業でも、ワイワイガヤガヤと楽しんでやってくれるから、見ているだけでも楽しく気持ちのいいものである。昨年夏の県大会の使役奉仕をしたときにも、関係者の方々から「久しぶりにすがすがしい学生さんたちに出会えた」とお褒めの言葉をいただいた。

日本一ビューティフルな馬術部を目指して

一九九年秋頃までに二十数名の学生たちの熱心さはますます高まり、馬二頭ではとても足りない状況になった。何とか馬の数を増やしたいと念願していたところ、中央競馬会美浦トレーニングセンターの田中和夫調教師から馬一頭を譲渡しようという申し出をいただいた。史上最強の馬とも言われたあのシンボリルドルフの子で、牝の四歳、きれいな栗毛の馬である。さっそく俄か仕立ての馬房を増築して十一月に入厩、麗澤の桜並木に因んで「麗桜（れいおう）」（愛称・さくら）と名づけられた。

先の小金と麗花は、すでに乗馬用に調教されたものを譲り受けたのであったが、麗桜はほやほやの競馬上がりで乗馬用としては全く未調教である。したがって、今度は学生たちがよってたかって新馬調教に取り組むことになるのだが、馬は扱う人の性格に似ると言われている。ひねくれてどうにも手に負えない馬になるのか、それとも素直で穏やかな性格の乗馬に育ってくれるのか。血統、素質ともに申し分ない馬だけに、この新馬を育てる学生たちのお手並み拝見といきたいところである。

一年余り前から二人の馬術家が同好会の指導に来て下さっている。いずれも立教大学馬術部ＯＢの方で、年齢はすでに七〇歳を越えるその道の達人である。このお二人の存在が馬に関しては素人集団の我々にとってどれほど心強いか、そしてどれほど多くのことを学ばせていただいたかは計り知れない。その数多くの教訓の中でも、馬乗りにとって一番大事なことは「思いやりの心」であるという。ところが、民間の乗

馬クラブはビジネスがからむし、大学の馬術部は試合の成績本位になりがちで、馬乗り本来の「思いやりの心」の実現なんてほど遠いと嘆いておられるのである。

ある時、そんなお二人が何故われわれのような弱小馬乗り集団のところに来て下さるのか理由を尋ねてみた。そのお答えは「麗澤には思いやりの心を実現できる理想の馬乗り集団になる素質があるからだ」というものであった。もちろん、これにはお世辞の意味合いが多分に含まれているのであろうが、私は敢えてそのお言葉を鵜呑みにして有難く受けとめさせていただきたいと思う。学生たちが、それを励みにして、馬に対して、人（仲間）に対して、本当の意味での「思いやりの心」を育ててくれればと思うからである。

学内においても乗馬同好会の活動実績は次第に認められ、今年度（一九九六年四月）から「麗澤大学馬術部」に昇格することが決まっている。大学公認の正式の部になることで、日本学生馬術連盟に加盟する資格も得ることになる。学生たちには、馬術の技量も向上させてほしいし、試合で優秀な成績も収めてもらいたい。しかし何よりも「思いやりの心」に満ちた日本一ビューティフルな馬術部をこの麗澤の地に築きあげることを目指してもらいたいと思う。愛する馬たちと共に……。

進路・就職を考えるにあたって

就職部

学生諸君が自己の進路・就職を考える際に、ご家族の皆様と充分に話し合っていないことが多く見受けられます。人生のスタートとして大事な進路・就職について、ご家族で充分話し合って頂きたいと思います。「進路・就職を考えるにあたって」就職部では、どのように相談・指導を行っているかをお知らせすることで、話し合いの際の参考にして頂きたいと思います。

（一）自分を見つめ直すこと。

ご子弟には、「今までの自分の生活を振り返ってみて自分を見つめ直すことが、社会人になるにあたって非常に大切なことです」とお話ししています。それではどうやって見つめ直すかといいますと、「中学、高校、大学時代の自分は何をして来たか」「学業以外に何に打ち込んだか」「自分は何を考えて来たか」ということです。そうした中からこれから何がしたいかが見えてくると思います。

人はその育った環境によって性格が形造られるものだと言われています。同じ兄弟でも顔が違うように、人はそれぞれの性格があります。自分を見つめ直し、そして自分の適性についてよく考える必要があります。

企業・団体・政府の面接の方は、よくこのことの大切さを指摘されます。面接でよく聞かれる「自己PR」などもこうした事を早くからやって来た人には難しくはありません。

（二）大学で何を学び、どのような力をつけたかが問われる。

まず基礎学力をつけることが大切です。就職活動には

就職試験がついてまわります。これは基本的には特別なことを試験するわけではありません。一般常識、時事問題、作文等の試験が中心です。例えば、社会人となって報告書、企画書を提出するといった場合、作文力が必要でしょうし、勿論誤字があってはならない訳です。

こういった意味で社会人としての常識、その業界についての知識が必要なのです。これは新聞を丹念に読む習慣を身につけることによって力がつきています。日常から自分を磨いてほしいと思います。

授業を大切にすることは勿論、幅広い教養と専門分野の深い学習、ゼミの学習は不可欠です。

（三）課外活動やゼミを通じて充実した学生生活を送ること。

学生生活の中で卒業後の自分の「目標」を持つこと。「充実した学生生活」を実感する学生は、自分への自信につながります。面接では「学生生活で何をしましたか」「学生生活で何を得ましたか」と必ず聞かれます。その時にどのように答えるかはこれにかかっているといってよいでしょう。

またサークル活動やゼミが学生の人格を形成し成立を促します。「先輩と後輩」の関係を通じて就職活動が展開します。在学中から先輩とのつながりをもっておくことでしょう。

（四）公務員、教員について

公務員には国家公務員と地方公務員があります。国の省庁やその出先機関で働くのが国家公務員、都道府県庁や市（区）役所、町村役場で働くのが地方公務員です。今、公務員には時代の激しい変化に対応した行政の広範かつ機動的な対応が求められています。公務員は全体の奉仕者であり、住民の生活向上に心掛ける心構えが大切です。最近は面接も重視されてきましたから安定志向によりかかった受験は禁物です。

教員は、生徒数等の減少で採用人数を減らしています。また、府県別、教科別に採用数の差があります。しかし、自分の専門性を深められますので教職への意志を固めて的確な情報把握と早期の取り組みで努力していくことが大切です。

（五）「Uターン」希望学生、女子学生の就職について

地元に帰っての就職を希望する場合、地元企業の採用スケジュールや採用方法について、商工会議所や地元マスコミなどにも問い合わせる必要があります。この際には家族の協力が不可欠です。また地元で就職活動をしている友達等から情報をもらうことです。

地方銀行の場合、地方支店でセミナーや第一次選考を行うことがあります。各銀行によってまた年次によって事情が異なりますので家族と協力しながら情報収集をして頂きたいと思います。

女子学生の場合、業種によっても異なりますが、「自宅通勤」が望ましいという企業も多くあります。就職先を検討する時、こういったことも考慮する必要があります。

（六）就職部を上手に利用しよう

就職部には各企業・団体の情報ファイルが約二〇〇〇あります。その中には、送付されてきた会社案内・求人案内の他に、就職部が企業を直接訪問した時の感想・意見が書かれている企業訪問報告書が多数含まれています。

就職部ではナマの情報も色々と持っていますので、直接聞くのも進路・就職を考えるうえで役に立ちます。

親身になって相談にものっていますので、是非上手に利用するようにお話し下さい。

就職部は、大変役に立つ情報ステーションです。

最後にエピソードを一つご紹介したいと思います。本学に一月半ば、ある企業の方が二名、来年度の採用依頼にお出でになりました。

午前中に他の大学四校を訪問して、最後に麗澤大学をお訪ねになりました。校内に入って、所用を思い出され会社に連絡をと思い、電話を探しました。生憎、そばの電話がふさがっていて、近くにいた学生に電話ボックスの場所を尋ねたそうです。尋ねられた学生が非常にメリハリのある応答で、電話ボックスの場所まで案内してくれたそうです。

その後で就職部にお出でになり、開口一番、この話をされ〝今まで長い間採用活動をしてきましたが、あんな学生に初めて会いました。あのような学生なら是非欲しい〟とのことでした。

ほんの短い時間でも、人を感動させ、あるいは疲れを癒すことができます。

こうした学生がどんどん育っていって欲しいと思います。

編集後記

本誌第二号では、麗澤教育を地道に支えている課題活動の中心である各部顧問の諸先生の玉稿をいただきました。原稿を読むうちに麗澤精神はまさしくクラブ活動によって培われているという事実を確認するとともに、有り難く感謝の気持ちをもった次第です。クラブでは先輩・後輩の密度の高い関わりが従来のまま存続し伝統を継承しています。

建学の理念を教育する授業は必修科目として存続されていますが、授業では理念的なことしか扱うことはできません。実際の行動はクラブ活動等を通じて具体的に指導するしか他に方法がありません。本誌を通じて麗澤精神を培う場としての課外活動の重要性を認識していただければ幸いです。

（編集責任者・外国語学部教授・水野治太郎）

編集　『麗澤教育』編集委員会
発行　麗　澤　大　学
〒二七七
千葉県柏市光ケ丘二ノ一ノ一
電話　〇四七一―七三―三七〇〇
印刷所　昌美印刷株式会社
東京都足立区綾瀬二ノ二六ノ七
電話　〇三―三六九〇―三一九六
一九九六年四月二〇日　発行